



2014 年度 会員校ミーティング

1. スケジュール

日時：2015 年 1 月 14 日（水）13：00～14：00

会場：関東 立命館大学 東京キャンパス 教室 2

関西 立命館大学 衣笠キャンパス 至徳館 304 東会議室

2. 議題

1. 2015 年度以降の体制について（案）

2. 新規入会校について（報告）

2014 年 10 月 神戸学院大学

3. その他

2014 年度地域別企画（東日本地域）について

「日本大学教学戦略シンポジウム ―「教育のオープン化」の“いま”と
“これから”―」（2015 年 3 月 28 日（土））

全体スケジュール

13：00－14：00 会員校ミーティング

14：00－16：30 懇談会企画

以上



2015年1月14日（水）

2014年度 全国私立大学FD連携フォーラム
会員校ミーティング 出席者一覧

	大学	所属名称	職位
田中 俊也	関西	教育開発支援センター	センター長
竹中 喜一	関西大学	授業支援グループ	
富田 則幸	関西学院	教務機構事務部（高等教育推進センター担当）	課長
中村 洋右	関西学院	教務機構事務部（高等教育推進センター担当）	
池ヶ谷 浩二郎	創価	総合学習支援オフィス	副部長
金井 尚也	中央	学事部 企画課	課長
秋山 裕美	中央	学事部 企画課	
井上 真琴	同志社	学習支援・教育開発センター	事務長
野田 宣彦	同志社	学習支援・教育開発センター	教育企画係長
児美川 孝一郎	法政	教育開発支援機構FD推進センター	センター長
川上 忠重	法政	教育開発支援機構FD推進センター	推進プロジェクト・リーダー
平山 喜雄	法政	学務部 教育支援課	課長
細川 由佳	法政	学務部 教育支援課 FD担当	
客 夢暁	法政	学務部 教育支援課 FD担当	
荒井 康雄	明治	教務事務部 教務事務室	
沖 裕貴	立命館	教育開発推進機構	教育開発支援センター長
土岐 智賀子	立命館	教育開発推進機構	講師
石坂 和幸	立命館	教学部	次長
清水 郁子	立命館	教学部 教育開発支援課	課長
岡本 詠里子	立命館	教学部 教育開発支援課	
長谷川 岳史	龍谷	大学教育開発センター	センター長
腰山 千明	龍谷	教学企画部	
小牧 慎二	早稲田	大学総合研究センター	調査役
米内 達也	早稲田	大学総合研究センター	
戸田 隆也	青山学院	学務部教育支援課	課長
旭 馨	神奈川	教育支援センター	課長
出石 稔	関東学院	法学部	副学長
池本 尚	北里	教学センター	事務長
雨宮 ゆり	京都産業	学長室（教育支援研究開発担当）	
深堀 太博	甲南	大学企画室	
生田 哲朗	神戸学院	教育開発センター	グループ長
中山 郁	國學院	教育開発推進機構	准教授
小濱 歩	國學院	教育開発推進機構	助教
長嶋 美代子	芝浦工業	教育イノベーション推進センター事務課	課長補佐
西川 鈺治	中部	大学教育研究センター	次長
大熊 紫	中部	大学教育研究センター	
井上 史子	帝京	高等教育開発センター	教授
菅原 敏之	東京農業	学務部	部長
大塚 寛	東京農業	学務部	次長
田中 明紀	東洋	F D推進支援室	課長
渡辺 浩成	東洋	学長室 学長事務課	課長補佐
辻 忠博	日本	FD推進センター	副センター長
大嶽 龍一	日本	学務部 教育推進課	課長補佐
後藤 裕哉	日本	学務部 教育推進課	主任
岸部 亨	明星	教務企画課	課長
青田 淳	明星	教務企画課	主任

2015 年度からの体制について（案）

「2013-2014 年度の体制について」（2013 年 6 月 15 日全国私立大学 F D 連携フォーラム総会）で確認された体制の任期が満了することを受けて、以下の通り 2015 年度以降の体制について提案する。

1. 代表幹事校制度の運用について

フォーラムのより安定的な運用を目指し、地域担当幹事校として 1 年務めたのちに、着任 2 年目に代表幹事校を兼務する制度としたい。本制度では、代表幹事校の任期を 1 年へと短縮し、毎年度、東日本地域と西日本地域での交代制とする。（表 1）なお、本制度の導入には規約改正が伴う。（表 2）

本制度を導入するにあたり、初年度（2015 年度）のみ、1 年間、地域担当幹事校兼代表幹事校を務めることになる。2013-2014 年度は、東日本地域が代表幹事校（法政大学）であることを鑑み、西日本地域から当該大学を選出することになる。

（表 1）代表幹事校の担当について（新制度を導入した場合）

	2015	2016	2017	2018	2019	2020
東	A	A	D	D	F	F
西	B	C	C	E	E	G

 が代表幹事校

（表 2）新制度導入に伴う規約改正について

新制度を導入した場合、「第 3 章 組織」幹事会 第 8 条 2 の規約の改正を伴う。

現行	改正後
第 3 章 組織 （幹事会） 第 8 条 本フォーラムに幹事会を置き、全幹事校で構成する。 2 代表幹事校、地域担当幹事校、任期の定めのある幹事校および事務局校の任期は 2 年とする。ただし、地域担当幹事校および任期の定めのある幹事校、事務局校についてはいずれも再任を妨げない。	第 3 章 組織 （幹事会） 第 8 条 本フォーラムに幹事会を置き、全幹事校で構成する。 2 代表幹事校の任期は 1 年、地域担当幹事校、任期の定めのある幹事校および事務局校の任期は 2 年とする。ただし、地域担当幹事校および任期の定めのある幹事校、事務局校についてはいずれも再任を妨げない。

2. 任期の定めのある幹事校の選出について

事務局校より、創価大学、龍谷大学に打診を行い、内諾を得ている。なお、両大学ともに再任となる。

3. 2015 年度の体制について

1、2 を踏まえ、以下のように 2015 年度の体制を提案したい。なお本体制は 2015 年度総会にて審議、承認を行う。

- ・代表幹事校：立命館大学
任期：2015 年 4 月 1 日～2016 年 3 月 31 日（1 年間）
- ・地域担当幹事校（東日本地域）：中央大学
任期：2015 年 4 月 1 日～2017 年 3 月 31 日（2 年間）
- ・地域担当幹事校（西日本地域）：立命館大学
任期：2015 年 4 月 1 日～2016 年 3 月 31 日（1 年間）
- ・任期の定めのある幹事校：創価大学、龍谷大学
任期：2015 年 4 月 1 日～2017 年 3 月 31 日（2 年間）
- ・事務局校：立命館大学
任期：2015 年 4 月 1 日～2017 年 3 月 31 日（2 年間）

なお、2016-2017 年度の地域担当幹事校（西日本地域）については、2016 年度総会にて審議予定である。



2014 年度 全国私立大学 FD 連携フォーラム懇談会企画

1. 概要

日時：2015 年 1 月 14 日（月）14：00－16：30

会場：関東 立命館大学 東京キャンパス 教室 2

関西 立命館大学 衣笠キャンパス 至徳館 304 東会議室

内容：関東、関西でそれぞれ 3 テーマに分かれて、グループディスカッションを実施した後、各グループ代表者からの個別報告（各 3 分程度）を情報共有することにより、各大学での FD に関連する取り組みの改善や今後の方針等の検討情報とします。

2. タイムスケジュール

時間	内容	備考
14：00～14：10	挨拶・企画の流れについて	
14：10～15：25	テーマ別ディスカッション	関東・関西の会場ごとで実施
15：25～15：40	休憩	
15：40～16：20	全体報告会	TV 会議で接続し、関東・関西全体で実施
16：20～16：30	まとめ・挨拶	

3. テーマ一覧

テーマ	トピック
A	教学マネジメントからみた IR (Institutional Research) による教育改善 教育の恒常的な質向上に向けて、多くの高等教育機関が FD 及び SD と融合した形での IR 推進が行われています。 各大学での IR に関する取り組みを情報共有することにより、私立大学に特化した IR による「教育プロセスからアウトカムへ」について意見交換を行います。
B	教育のオープン化に関する各大学の取り組み MOOCs、OCW や反転授業を始めとする教育情報のオープン化、共有化による教育システムの構築が行われています。 一方、その教育効果やインフラ整備を含めたコスト面と教育情報の開示方法について、疑問視する指摘もあります。 今後の大学間連携を含めた各大学の取り組みの事例紹介から意見交換を行います。
C	学生・職員・教員の協働による学生参加型 FD について ボランティア活動を主体とした、学生からの提案による「授業改善」に関する取り組みが一部、定着しつつあります。しかし、イベントや交流会を主目的とした取り組みも散見され、また、本来の「教員 FD の改善」には、「学生 FD」不要論が多いのは周知の事実です。 学生参加型 FD の発展性について意見交換を行います。



2015年1月14日（水）

2014年度 全国私立大学FD連携フォーラム
懇談会企画

テーマA

教学マネジメントからみたIR（Institutional Research）による教育改善

関東会場：教室 2	
金井 尚也	中央
秋山 裕美	中央
児美川 孝一郎	法政
小牧 慎二	早稲田
米内 達也	早稲田
旭 馨	神奈川
池本 尚	北里
小濱 歩	國學院
菅原 敏之	東京農業
大嶽 龍一	日本
岸部 亨	明星

関西会場：至徳館304東会議室	
森 朋子	関西
原田 健太郎	関西
中村 洋右	関西学院
井上 真琴	同志社
野田 宣彦	同志社
河井 亨	立命館
今川 新悟	立命館
長谷川 岳史	龍谷
雨宮 ゆり	京都産業
深堀 太博	甲南
大熊 紫	中部

テーマB

教育のオープン化に関する各大学の取組み

関東会場：教室 1	
池ヶ谷 浩二郎	創価
川上 忠重	法政
平山 喜雄	法政
清水 郁子	立命館
中山 郁	國學院
井上 史子	帝京
渡辺 浩成	東洋
辻 忠博	日本

関西会場：至徳館302会議室	
岩崎 千晶	関西
富田 則幸	関西学院
沖 裕貴	立命館

テーマC

学生・職員・教員の協働による学生参加型FDについて

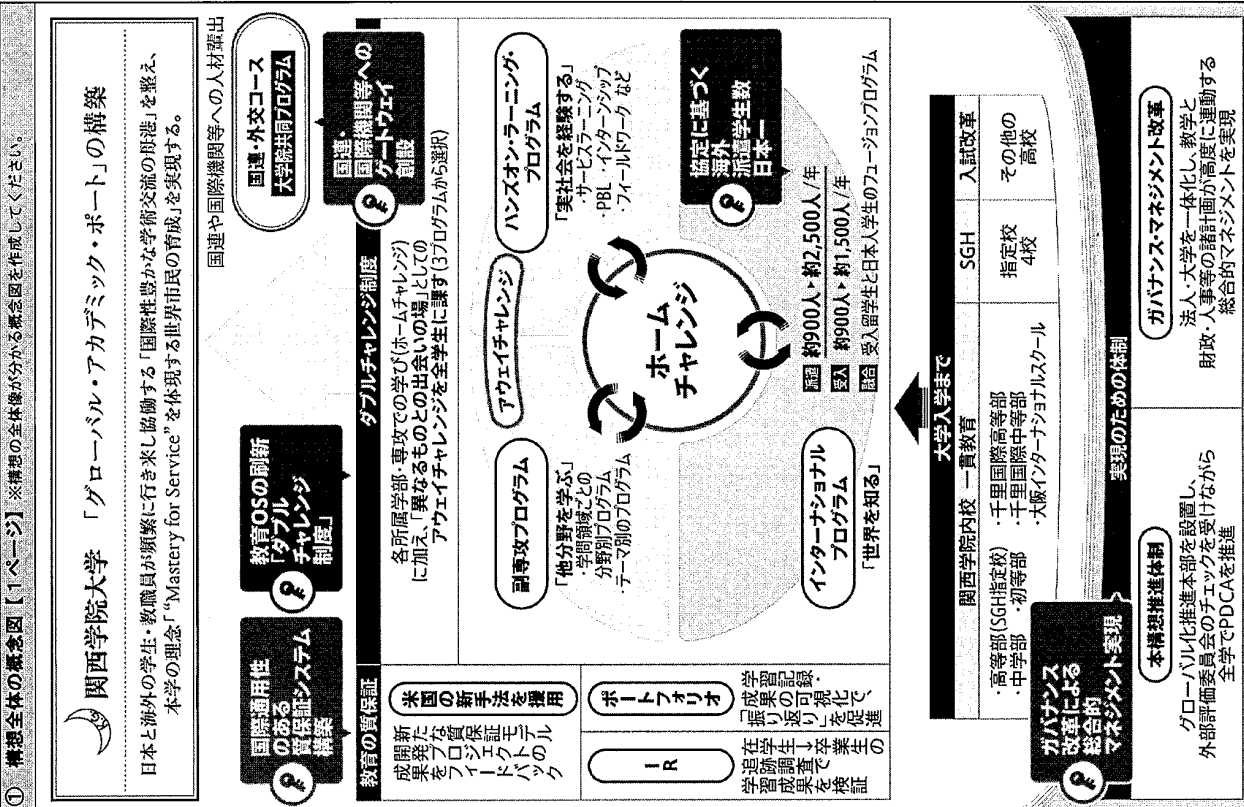
関東会場：教室 3	
細川 由佳	法政
客 夢璐	法政
出石 稔	関東学院
長嶋 美代子	芝浦工業
大塚 寛	東京農業
田中 明紀	東洋
後藤 裕哉	日本
青田 淳	明星

関西会場：至徳館301会議室	
田中 俊也	関西
竹中 喜一	関西
土岐 智賀子	立命館
岡本 詠里子	立命館
腰山 千明	龍谷
西川 敏治	中部

テーマA

2. ガバナンス改革関連 (2) ガバナンス	
⑤ IR機能の強化・充実【1ページ以内】	
【これまでの取組】 IRは多義的な用語であるが、本学では「自大学に関する客観的なデータを収集・分析し、経営・教学マネジメントに活用する組織的機能」と定義し、以下のとおり推進してきた。	
1. 基礎的データ 平成18年度に大学基準協会で第1回機関別認証評価を受審する際に提出が義務付けられていた大学基礎データと、本学が独自に設定した評価指標のデータを合わせたデータベースを社団法人日本基準協会と共同で開発し、ウェブで学内から教職員が見られるようにした。大学に関する基礎的なデータは学部別・年度別で整理されている。	
2. 新中期計画関連データ 平成21年度から10年間の「新基本構想」とその具体的な施策「新中期計画」を策定する過程において、入試・就職・ブランドイメージ等の過去からの推移や他大学との比較可能なデータを収集し、活用している。また、進捗状況（工程評価）、アウトプット、アウトカム等の評価データをデータベース化、PDCAの強化に役立てている。	
3. 学習および汎用的能力に関するデータ 「大学IRコンソーシアム」に平成23年度発足時から参画し、在学生の学習に関する環境・体験・状況、汎用的能力等を追跡調査し、学年進行による推移、年度の変化、学部間等の比較を行っており、平成25年度は全11学部が参画している。また、平成24年度大学改革推進等補助金「大学関連連携共同教育推進事業」に採択された「教学評価体制（IRネットワーク）」による学士課程教育の質保証（8大学共同）において、卒業生調査を企業や経済団体など産業界と協力して実施し、卒業後の汎用的能力の推移を調査し、大学教育の有用性の検証に取り組んでいる。	
4. 総合的学習支援のためのデータ 学生の入学から卒業までの多様なデータを結合させて総合的な学習支援に活用することについては入試部、キャリアセンターが実施している。	
【本構想における取組】	
1. 学習および汎用的能力に関するデータ 本構想では、これまでの調査で得た知見や手法をもとに、独自の学生調査・卒業生調査を設計・実施した上で学習成果測定の指標を開発・分析し、グローバル人材として活躍するために必要な知識・技能についてフィードバックを行い、教育プログラムへ還元する。	
2. 総合的学習支援のためのデータ 高等教育推進センターが中心となり、学内の各部署やデータベースに散在している、入学から卒業までの様々な学生データを集約するIRデータベースを平成26年度に構築し、総合的に学生を支援するために多様な分析が可能となる環境を整備する。	
3. 新中期計画関連データ 理事長・学長直下に設置される「総合企画室（仮称）」において、引き続き他大学との相対比較可能なデータや新中期計画の評価データなどを長期的に収集・蓄積して分析を行う。さらにトップによる経営戦略策定の支援や、学院全体の総合的マネジメントの進捗管理・成果検証に役立てる。	

(大学名：関西学院大学) (申請区分：タイプB)



(大学名：関西学院大学) (申請区分：タイプB)

ミドル・アップダウンマネジメントによる教育改善への取組 京都産業大学 教育支援研究開発センター

教育の質向上の観点からみた教育支援研究開発センターの役割

教育支援研究開発センターでは、「トップレベル」(全学、大学トップ)、「ミドルレベル」(各学部・各部署・各教育プログラム)、「ボトムレベル」(各科目・各教職員)の3層構造からなるPDCAサイクルを回すことで、大学全体の教育の質保証、教育改善に全学的に取り組んでいる(図1参照)。各レベルのPDCAサイクルを意識しながらFD/SD活動に取り組むことで、教育改革・改善のスピード化と実質化を図る。

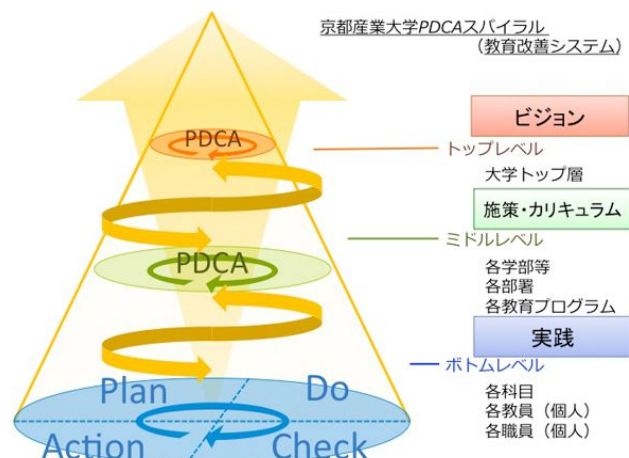


図1 京都産業大学における教育の質向上スパイラル(平成23年4月策定)

教育支援研究開発センターでは、

- ①学部廻り(全8学部): 各学部の学部長、副学部長(またはFD/SD担当者)、学部長補佐等、センター教職員を交えた意見交換
- ②学長ミーティング(セラデス勉強会): 学長、副学長、センター教職員とのビジョンの共有

を通じて、トップ層・ミドル層・ボトム層をつなぎ、大学全体の質保証に努めてきた。

【成果】

小規模で非公式な場での「対話」は、

- ・構成員の本音、教育観などを引き出し、「新任教員研修会」等で各教員(ボトム層)と共有した。
- ・学長のビジョンを各学部(ミドル層)に伝達した。

【課題】

フィードバックの遅れ≒PDCAサイクルの遅れ

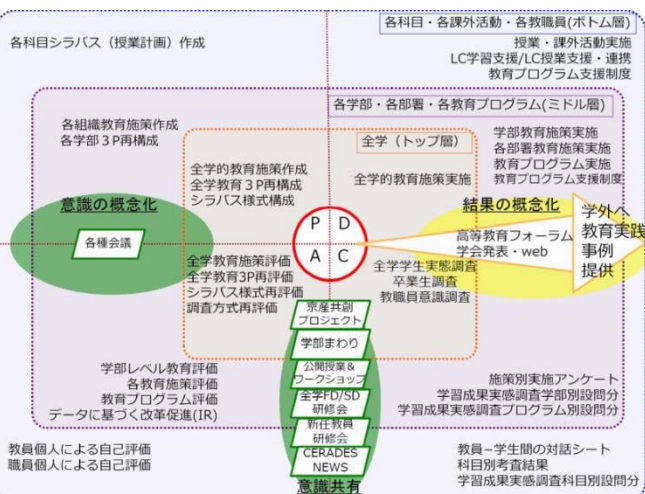


図2 京都産業大学における教育の質保証システム(平成23年4月策定、平成26年10月改正)

今後の教育支援研究開発センターの取組の方向性

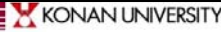
○学部FD/SD推進ワーキンググループ(各学部等副学部長クラス)の機能強化

- ・トップ層とボトム層の間での意思伝達・施策への落とし込みが早まる。(垂直的つながり)
- ・学部間の情報共有と連携が促進される。(水平的つながり)

○各学部への情報提供・データ分析に基づいた提案型の改革支援

- ・各学部固有の問題意識や課題について、他部署と連携しながら、解決にむけた施策を共に検討する。

Ex.「学習成果実感調査」結果から中・低意欲層の抽出→教学データと紐付けて学修支援の方策の提案



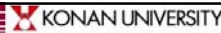
甲南大学でのIRに関する取り組み

2015年1月14日(水)
全国私立大学FD 連携フォーラム懇談会企画
甲南大学 大学企画室 深堀 太博



甲南大学の現状

- きっかけは、2009年度の同志社・北海道・大阪府立・甲南の4大学連携事業(正式名称:戦略的大学連携事業「相互評価に基づく学士課程教育質保証システムの創出一国公私立4大学IRネットワーク」)採択
- 甲南大学の現状は、IRという言葉が、やっと学長から発せられるようになったところ
- IRの具体的成果として、学部等に還元できている事例はほとんどない
- 取り組みを通じ、データ収集が進んでいることから、執行部からの依頼や所管業務で必要となった教学データについては、迅速に対応出来る状況



具体的な取り組み① 大学間連携共同教育推進事業の推進

- 平成21年度戦略的大学連携事業「相互評価に基づく学士課程教育質保証システムの創出一国公私立4大学IRネットワーク」(同志社・北海道・大阪府立・甲南の4大学連携事業)
- 平成24年度大学間連携共同教育推進事業「教学評価体制(IRネットワーク)による学士課程教育の質保証」
- 上記2つの事業を通じた取り組み・研究
 - IRシステムの構築
 - 各大学の英語教育の評価→この2点とも、自大学のみではなく、様々な大学で活用することが可能な枠組みであることを意識することが肝要



具体的な取り組み② 大学IRコンソーシアムへの参画

- 以降、少なくとも、学生調査は継続して実施(1年生調査は2009年度以降、3年生調査は2011年度以降)し、毎年、全学部・各部局の長に対して集計結果を配付
- コンソーシアムのデータベースに格納するデータとして、学生調査データ以外に、「大学データ」として学校基本調査で用いるような情報や、「学生データ」として性別、生年月、入学年、所属学部系統、出身高校卒業年・所在地、英語科目(必修)の履修履歴・成績(GP)、GPA、修得単位数、英語標準テストのスコア(TOEIC換算点)を集約



学生調査結果の学部長等への報告

- 学生調査報告の配布
 - 8大学連携事業で作成される報告書に加え、設問ごとに、甲南大学全体・8大学全体・学部毎それぞれの集計値を示した一覧表を配布(2009年度から毎年)
 - 具体的な反応はこれと言ってない
 - この反応に関する考え方
 - 「ある程度見ているが意外性がない・想定内」なだけ? → これが、“感覚”が可視化され、FactBasedに変わった瞬間で、実は、最も大切なこと(“ウチの子らはこんな感じ”からの脱却)
 - ただ、カリキュラム改革等を行った時には、その値を気にしている様子もあり、2009年からの5年間でトレンドを示したことは今までなかったため、現在、作成中

5

具体的な取り組み③ 認証評価への活用

- 2012年度に実施した、自己点検・評価報告書作成の際、評価期間中に設置した新しい学部に関して、学生調査結果を活用
- 認証評価受審時の大学評価分科会報告書(案)の質問に対する回答の根拠として活用

6

自己点検・評価報告書への活用

知能情報学部

- 育成目標:人間力をベースに感性・知性で高度国際情報社会におけるリーダーシップがとれる人材の育成
- 入学後に増加した能力: **専門分野や学科の知識、コンピュータの操作能力、数理的な能力**などとなっている。
(2011年度3年次生調査結果)

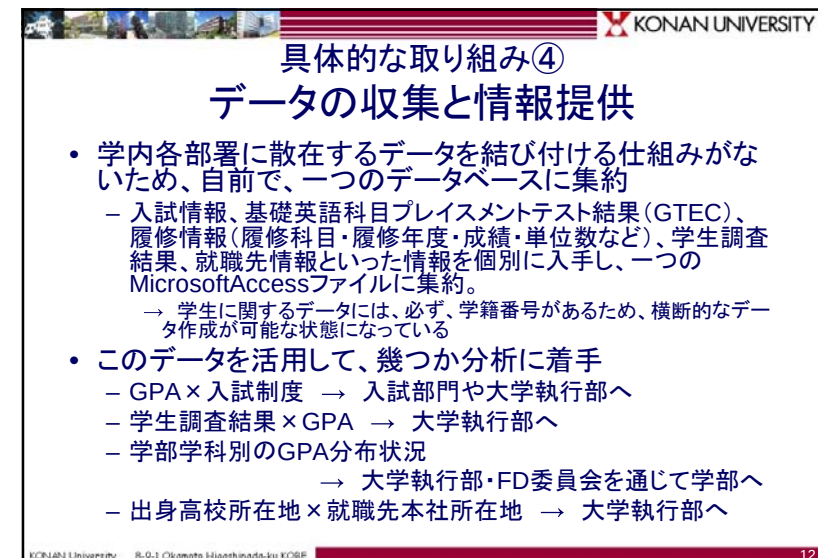
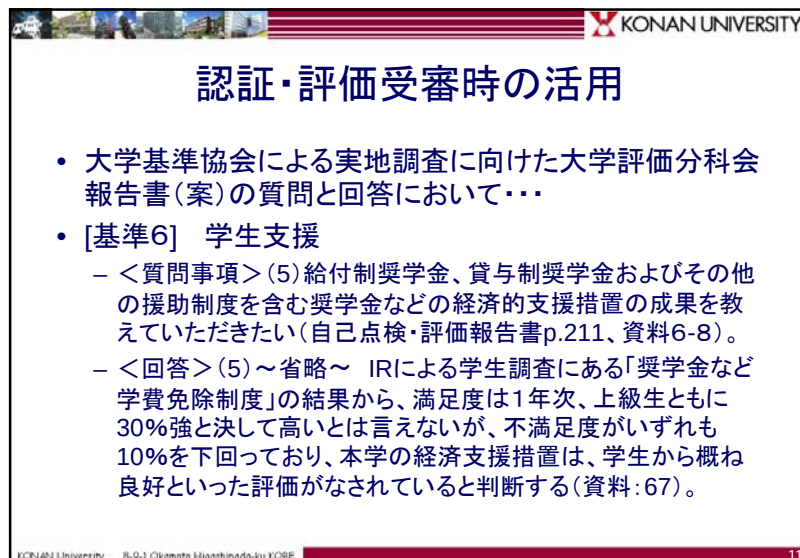
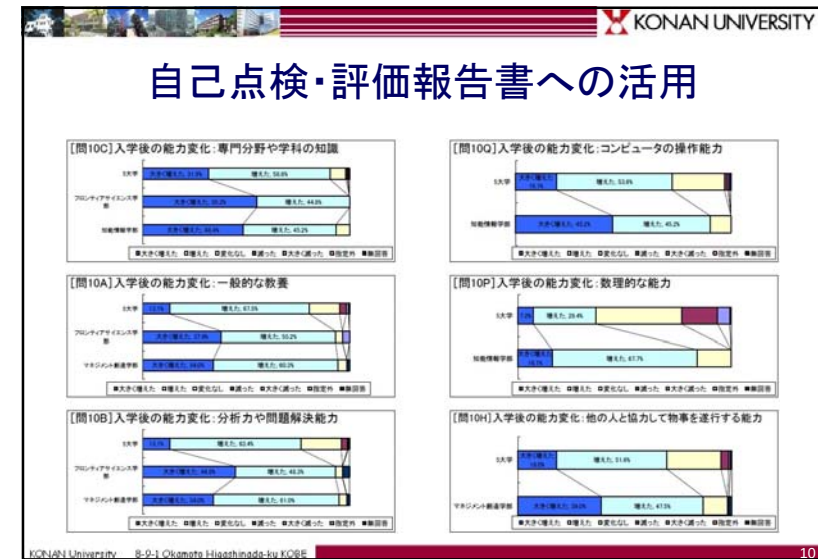
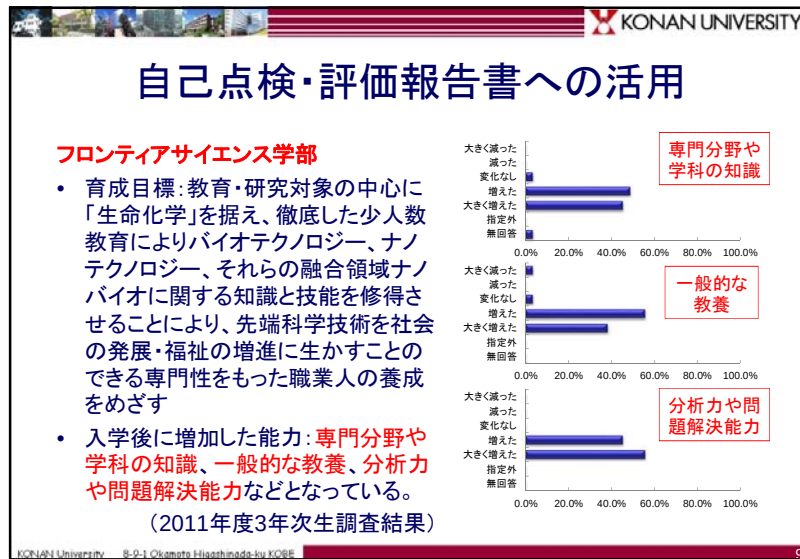
7

自己点検・評価報告書への活用

マネジメント創造学部

- 育成目標:教養と品格を備え、総合的マネジメント能力を有し、社会に貢献できる人材の養成をめざす
- 入学後に増加した能力: **分析力や問題解決能力、一般的な教養、他の人と協力して物事を遂行する能力**などとなっている。
(2011年度3年次生調査結果)

8



学びの実態調査の枠組み ～入口から出口までの学生の学びの可視化を目指して～

Writer 教育開発推進機構 川那部隆司・河井亨



学生の「学びの実態調査」～実態は何を意味するか～

教育開発推進機構のIRプロジェクトは、学部等の教学機関と連携しながら2009年度より「学びの実態調査」を実施し、2014年度で第6回目となります。この「学びの実態調査」は、特に正課に焦点を当てて学生の学びの実態を把握するものです。学びの実態、という言葉には2つの意味があります。一つは学習成果と呼ばれるもので、学生がさまざまな経験を通じてどのような力を身につけたか、どのような成果を挙げたかといったものです。近年の大学教育では、教育の質保証の観点から学生の学習成果をきちんと測定し、その結果を自らの教育改善に活用したり、外部の関係者に説明したりすることが求められています。この学習成果測定（Learning Outcomes Assessment）は、計画策定や政策形成、あるいは意思決定を支援するための情報を提供する機関調査（Institutional Research、以下IR）の中心的な役割の一つでもあります。

学びの実態という言葉が意味するもう一つの側面は、学生がどのような学びを経験しているか、どのようにそれに取り組んでいるかというものです。たとえば正課に関してなら、どのような授業を経験しているか、授業や授業外での学びにどのように取り組んでいるか、また授業以外の時間にどの程度学習しているかといった情報も学びの実態と言えます。

IRプロジェクトによる「学びの実態調査」では、学習成果と学習経験の両方について、学生自身に尋ねています。具体的には、正課を通じてどのような力が身についたと感じているかという成長の実感や正課の授業でどのような授業を経験したか、正課

CONTENTS

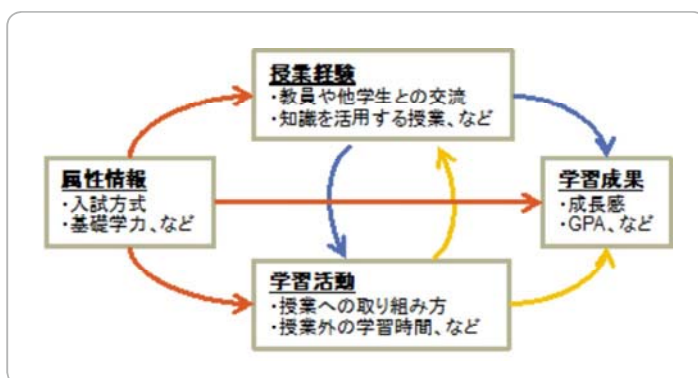
- | | |
|---|--|
| <p>01-03 学びの実態調査の枠組み
～入口から出口までの学生の学びの可視化を目指して～</p> <p>04 第三者の意見紹介
/ 日本の教学IRの主導的な役割を期待
FD glossary
/ 大学生の適応</p> <p>05 センター報告
/ 先生をやる気にさせる授業アンケート
ーほめながら改善点を示すー</p> | <p>06 シリーズ【教育の質保証】
/ 文学部「キャンパスアジア・プログラム」の
教育の取り組みと質保証について</p> <p>07 シリーズ【接続教育】
/ 「論理的思考法訓練を授業に生かす教本」
この本を作った「ねらい」と課題について</p> <p>08 Peerのこえ
/ 受験生のためにという思いを胸に</p> |
|---|--|

の授業にどのように取り組んでいるか、そして授業外の学習時間等を学部共通の設問として設定しています。また、調査時には学生証番号の記入も求めているため、分析の際には GPA や取得単位数といった自己評価以外の指標も用いています。さらに、第 6 回調査からは内部での改善と外部への説明という観点から、学部が定めている教育目標が、正課を通じてどの程度達成されたと感じているかも共通の設問として尋ねるようになりました。

調査結果のフィードバックと分析の視点

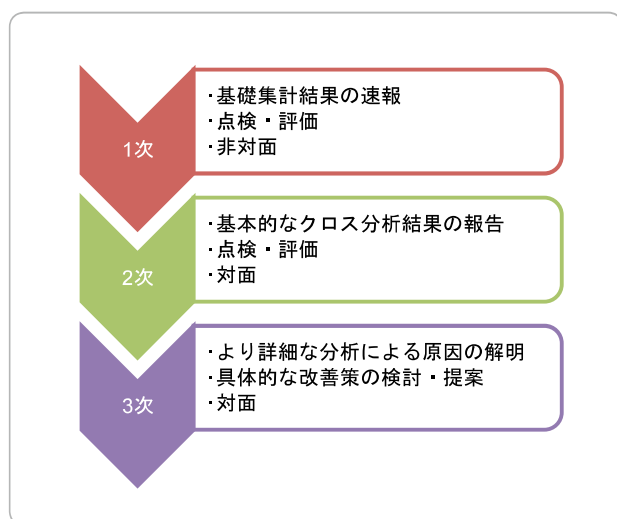
「学びの実態調査」の結果は、主には学部等教学機関の執行部に対して、3 段階のフィードバックを行います。1 次フィードバックは基礎集計結果の報告です。各設問について、それぞれの選択肢を選択した人数やその割合を算出し、表やグラフにして示すことで、結果を俯瞰的に把握することが可能です。また、速報性を重視し、メール等で学部等の担当者に送付しています。

2 次フィードバックでは、学生証番号を基に学びの実態調査のデータと入試方式や成績に関するデータとを紐付けた上で、複数の項目を組み合わせた分析結果を伝えます。たとえば、入試方式や入学時の基礎学力テストの得点といった入学時点で学生が備えている属性は、成長感や GPA といった学習成果とどのように関連しているか、授業への取り組み方や授業経験、授業外の学習時間等、大学での学習経験との関連はどうかといった分析を行います。また、大学での学習経験が学習成果とどのように関連しているかについても分析を行います。これらの結果は、提供している教育がうまく機能しているかどうかを点検・評価する際に必要となります。2 次フィードバックにおける分析では、しばしば「当たり前」と思われる結果が示されることがあります。たとえば、「授業に勤勉に取り組んでいる学生ほど GPA が高く、専門的知識が身についたと思っている」という結果は、おそらく何の意外性もないものだと思います。しかし、この意外性のない結果は点検・評価という点においては非常に重要になります。たとえば、授業への勤勉的な取り組みと成績や成長感との間に何の関係もなかったという結果が出たとすれば、それは成績評価が適切に行われていない可能性や真面目に授業に取り組んでも成長が実感できないような授業、カリキュラムになっている可能性を示唆しているからです。何らかの改善を進めたい場合には、確かに意外性のある結果が必要なことも多いですが、「うまくいっている」ことを確認し、それを周囲に説明していく上では「当たり前」の結果が必要になってくるのです。



＜ 図 1：学びの実態調査の分析枠組み ＞
（矢印は影響の方向を表す）

2 次フィードバックでは、提供している教育のどのような点に問題があるかやどのような点で成功しているかといった、点検や評価に焦点を当てています。しかし、ここで示される結果は、あくまでも状況を表していることが多く、なぜそのような結果になっているかという理由や原因については、必ずしも明らかにされているわけではありません。点検や評価は改善のきっかけにはなりますが、具体的な改善策や対応等を考える上では、理由や原因に関わる分析が不可欠です。そのため、2 次フィードバックではデータを介しての直接的な対話によって、理由や原因に関する仮説を考えたり、学部がより重点を置いている課題を引き出したりすることを目的としています。ここで得られた情報に基づき、より詳細な分析を行う 3 次フィードバックへと進んでいきます。したがって、1 次、2 次フィードバックは提供している教育等の点検・評価が、3 次フィードバックは結果の原因の解明がそれぞれ中心的な目的となっています。



＜ 図 2：学びの実態調査のフィードバックの流れ ＞

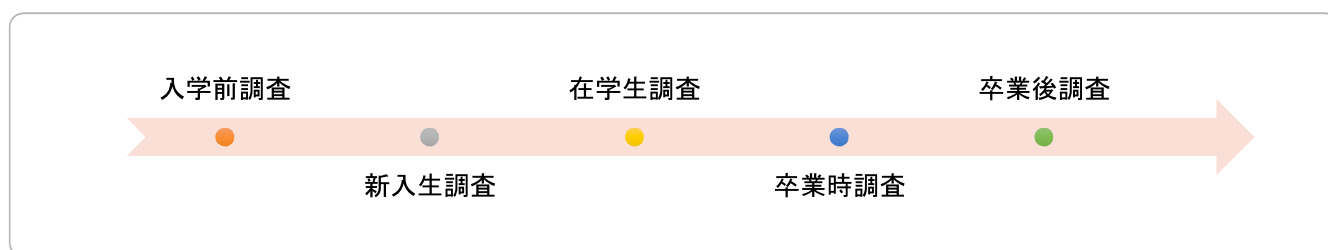
調査のタイミング

点検・評価を行う場合であっても、原因を解明していく場合であっても、ある一時点における学生の実態を把握するだけでは十分なことが多くあります。たとえば、ある特定のプログラムの教育効果を確認したい場合を考えてみましょう。教育効果を測る指標としてはテスト等による客観的な評価、アンケート等による学生自身の主観的な評価等さまざまありますが、これらのデータはいつ収集するべきでしょうか。プログラムに参加した学生の満足度やプログラムを受けて感じた問題点等を知りたいのであれば、当然プログラムへの参加後に調べるしかありません。しかしながら、教育効果を示すという点で考えると、プログラムに参加する前後の状態を比較して、どの程度変化があったかを調べる必要があります。なぜなら、プログラムに参加した後の状態だけを見ても、もともと能力の高い学生ばかりだった可能性が残ってしまうからです。つまり、プログラムへの参加によって、学生たちがどの程度の付加価値（added value）を得たのかを調べるためには、プログラム参加の前後の状態を比較することが大切なのです。

この付加価値という考え方は、大学教育全体の効果の検証にも当てはまります。卒業間近の学生の資質や能力を把握することは、学位授与方針が適切に守られているかを確認し、どのような学生を送り出すかを明らかにする上で非常に重要です。しかし、卒業直前の状態だけを把握した結果、能力の高い学生が大勢いることが明らかになったとしても、それは入学時点からもともと能力の高い学生がたくさんただけで、大学教育を通じての成長は特になかったということもあり得ます。

入口・中身・出口、その前と後

このことから、卒業間近の状態を把握すると同時に、入学時点での学生の実態を把握し、両時点の違いを明らかにすることが厳密な学習成果測定には欠かせません。そのため、IR プロジェクトでは、在学中の学生に大学での学びを振り返ってもらう「在学生調査」以外に、入学したばかりの新入生がそれまでにどのような学習経験を積んでおり、どのような能力や資質を身につけているかを調べる「新入生調査」と、卒業する直前で大学教育全体を通じてどの程度成長したと思っているかを調べる「卒業時調査」を開発・実施してきました。入学時点での実態、在学中の実態、卒業時の実態のそれぞれを結びつけ、いわゆる入口から出口までの学生の学びと成長の軌跡を描き出すことによって、各学部による教育の点検や評価のための正確なデータを手に入れることができます。さらに、具体的な改善策を考案していく上で、どのような学生が大学での学びに成功し、どのような学生が失敗しているのか、その原因はどこにあるのかを明らかにするためには、入学時だけでなく、入学前の学びの実態をより正確に把握することも必要になってきます。特に、小学校から大学までの一貫教育を進めている立命館大学にとって、大学入学時という入口よりもさらに以前の学びの実態を把握することはとても重要だと言えるでしょう。また、卒業する学生たちが社会で活躍しているかを点検・評価し、キャリア教育をはじめとする改善を図っていくためには、出口の後の、進学先の大学院や就職先の企業での実態をも併せて調べていくことが大切になります。



< 図3 IRプロジェクトが目指す質保証のための学びの実態調査の枠組み >

2014年度で第6回を迎えた「学びの実態調査」は、新入生調査、在学生調査、卒業時調査の3種の調査を実施することで、入口、中身、出口という教育の質保証を挙証する上で不可欠な時点での学生の学びの実態を抑えることができるようになってきました。今後は、この3時点における調査内容を精査し、より有用なものにしていくと同時に、「入口の前」と「出口の後」という2時点も加え、学生の総合的な学びと成長の軌跡を追いかけていくことを目標に、継続的な点検・評価および改善が可能になるよう努力していきたいと考えています。

2014 年 3 月 26 日

2013 年度指定研究プロジェクト報告会



龍谷大学
RYUKOKU UNIVERSITY

「教育活動を支援するための各種情報の活用方法」
(代表: 津島 昌弘<社会学部>)

2013 年度指定研究プロジェクト

「教育活動を支援するための各種情報の活用方法について」(報告)

研究代表者：津島 昌弘(社会学部)

1. 本プロジェクトの目的

現在、本学では、様々な形で教学に関する調査、データ収集・蓄積が行われている。しかしながら、収集・蓄積されたデータが有機的に共有・活用されているとはいえない状況がある。

また、学内の各部署における教育活動に関連する情報は、一定情報メディアセンターにおいて集約されているものの、各部署がそれぞれの必要性において管理し、学内にどのような情報が存在するのか把握が困難な状況にある。

そこで、本プロジェクトでは、教学に関連する諸情報について学内にどのようなものが収集されているのかヒアリング等の調査を行い、情報の所在、対象、性質、他部署がアクセス可能なものかどうかを分類・整理し、各種データから読み取れる傾向等を統計的に分析するとともに、将来的に教育活動支援に資する全学的な利活用体制のあり方を模索する。

2. 本プロジェクトの内容・方法

本学では、学校基本調査や学校法人基礎調査をはじめとする複数の教学系調査を通じて、教学関連データの収集・蓄積が行われているが、そのデータを全学的に利活用する体制が整備されていないことから、まず既存の教学システム等にどのようなデータが収集・蓄積され且つ抽出可能なのかについて確認を行った。

また、教学システム等から抽出可能な「成績(GPA)」、「卒業率」、「退学・除籍率」、「休学率」等と「入試区分」、「出身高校ランク」等に相関関係が見られるかを検証するとともに、全学的な比較・検証を行う上でのデータ収集・蓄積方法等の課題についても検証を行った。

3. まとめ

研究計画において、データ収集・整理後に、各種データから読み取れる傾向等を統計的に分析し、将来的に教育活動支援に資する全学的な利活用体制のあり方を模索する予定であったが、普段から全学単位や各学部単位で統計・分析することを目的として情報が収集・蓄積されていないせいか、データの収集・分類・整理等を行う過程において、かなりの時間を要することとなった。

しかし、本プロジェクトを通じ、本学が保有する教学に関連する各種データの抽出や加

【A】 龍谷

工にはかなりの時間を要するものの、既存の教学システムからでも様々な数値や情報が抽出可能なことを把握することができ、データの蓄積方法（コードの付番ルール等）を統一することで、ある程度容易に全学単位あるいは各学部単位での比較・検証が可能になることを確認することができたことは大きな収穫であると言える。

本プロジェクトにおいて確認された、各種データを用いた全学的な比較・検証を行う際のデータ収集・蓄積方法等に関する課題がクリアされれば、現在本学が保有する教学関連情報でも、今後本学が教学改革を検討・推進する上で、有益なデータとなることが期待される。

テーマB



関西大学

[在学の方へ](#)
[教職員の方へ](#)

[サイト内検索](#)
[Language](#)

[関西大学で学びたい方へ](#)
[企業・教育関係の方へ](#)
[保護者の方へ](#)
[卒業生の方へ](#)
[初めてご覧になる方へ](#)
[大学紹介](#)
[学部・院・別科・併設校](#)
[図書館・博物館](#)
[教育・研究](#)
[社会貢献](#)
[学生生活](#)
[国際交流・留学](#)
[就職・キャリア](#)

大学紹介 大学広報

[大学紹介トップ](#)
[概要紹介](#)
[理念](#)
[関西大学の取り組み](#)
[財務情報](#)
[キャンパス紹介・キャンパスマップ](#)
[大学広報](#)
[最新情報（一覧）](#)
[重要情報（一覧）](#)
[トピックス（一覧）](#)
[イベントカレンダー](#)
[プレスリリース](#)
[KUメールニュース](#)
[記者懇談会・研究発表会](#)
[関西大学通信](#)
[関西大学ニューズレター『Reed』](#)
[関西大学 Web Movie](#)
[創立120周年記念DVD](#)
[各種広報物案内・ダウンロード](#)

過去のトピックス

[2013年度](#)
[2012年度](#)
[2011年度](#)
[2010年度](#)
[2009年度](#)
[2008年度](#)
[2007年度](#)

Kan-Dai web 学部入学情報


[入学試験情報総合サイト](#)

関大生の活躍 課外活動情報


[関西大学ホーム](#) > [大学紹介](#) > [トピックス](#) > トピックス（詳細）

トピックス（詳細）

[いいね！](#) 5 [ツイート](#) 0

JMOOC「gacco」化学生命工学部提供講座の反転学習を実施しました。

JMOOC（日本オープンオンライン教育推進協議会）の公認配信プラットフォーム「gacco」において、[化学生命工学部](#)提供講座「化学生命工学が作る未来」が10月23日に開講され、千里山キャンパスで11月29日、反転学習（対面授業）を行いました。

反転学習では、河原秀久教授「日本古来の食文化 発酵力を実感しよう」、石川正司教授・山縣雅紀准教授「日本が誇る最先端分野 キャパシタを作って蓄電を体験しよう」、岩崎泰彦教授「先端医療とともに歩む 人体にやさしい高分子材料を体験しよう」、上田正人准教授「ハイブリッドカーや飛行機を支える金属・無機材料の強度を体験しよう」の4つのコースを実施しました。

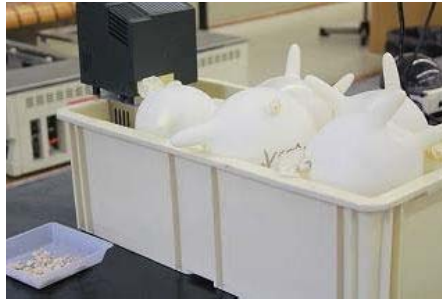
受講者は、発酵実験や乳酸菌の染色観察、電気化学キャパシタ製作、高分子の化学修飾、金属内部組織の加工など、最先端設備を備えた大学での実験を体験。教員の解説に聞き入り、各分野での理解を深めました。

▶ [「化学生命工学が作る未来」の詳細（「gacco」ウェブサイト）](#)



【B】 関西-1

研究活動と実績
関西大学の研究活動を紹介



2014/12/02/ 12:00 UP

[トピックス \(一覧\)](#)

[このページの先頭へ](#)

[個人情報の取扱いについて](#) [このサイトについて](#) [RSSについて](#) [関西大学Web基準について](#) [品 サイトマップ](#) [所在地一覧](#) [採用情報](#)

Copyright (C) 2013 Kansai University. All Rights Reserved.

関西大学 〒564-8680 大阪府吹田市山手町3丁目3番35号 (06) 6368-1121 (大代表)



関西大学

[在学生の方へ](#)
[教職員の方へ](#)

[サイト内検索](#)
[Language](#)

[関西大学で学びたい方へ](#)
[企業・教育関係の方へ](#)
[保護者の方へ](#)
[卒業生の方へ](#)
[初めてご覧になる方へ](#)
[大学紹介](#)
[学部・院・別科・併設校](#)
[図書館・博物館](#)
[教育・研究](#)
[社会貢献](#)
[学生生活](#)
[国際交流・留学](#)
[就職・キャリア](#)
[大学紹介](#)
[大学広報](#)
[大学紹介トップ](#)
[概要紹介](#)
[理念](#)
[関西大学の取り組み](#)
[財務情報](#)
[キャンパス紹介・キャンパスマップ](#)
[大学広報](#)
[最新情報（一覧）](#)
[重要情報（一覧）](#)
[トピックス（一覧）](#)
[イベントカレンダー](#)
[プレスリリース](#)
[KUメールニュース](#)
[記者懇談会・研究発表会](#)
[関西大学通信](#)
[関西大学ニュースレター『Reed』](#)
[関西大学 Web Movie](#)
[創立120周年記念DVD](#)
[各種広報物案内・ダウンロード](#)
[過去のニュース](#)
[2013年度](#)
[2012年度](#)
[2011年度](#)
[2010年度](#)
[2009年度](#)
[2008年度](#)
[2007年度](#)
[2006年度](#)
[2005年度](#)

Kan-Dai web

[学部入試情報](#)

[入学試験情報総合サイト](#)
[関大生の活躍
課外活動情報](#)

[関西大学ホーム](#) > [大学紹介](#) > [最新情報](#) > [最新情報（詳細）](#)

最新情報（詳細）

[いいね！](#) 4

[ツイート](#) 0

JMOOC「gacco」化学生命工学部提供講座 受講登録開始

JMOOC（日本オープンオンライン教育推進協議会）の公認配信プラットフォーム「gacco」において、化学生命工学部が提供する講座「化学生命工学が作る未来」の受講登録が開始されました。

「gacco」は、大学教授陣による本格的な講義を誰でも無料で受けられるウェブサービスで、講座を受講し修了条件を満たすと、修了証を取得することができます。

化学生命工学部では、化学・生命・マテリアルをキーワードに、21世紀の「ものづくり」と「先端技術」の発展に貢献できる研究に邁進しています。「化学生命工学が作る未来」では、その最前線で活躍する4人の研究者が4週間にわたり、それぞれの専門領域について講義を行います。

講座内容	化学生命工学部 吉田宗弘教授 第1週「安心できる未来の鍵を握る金属材料・無機材料」上田正人准教授 第2週「分子を設計する・分子レベルで考える蓄電技術で エネルギー問題へ挑戦」石川正司教授 第3週「化学の力で先端医療を支える」岩崎泰彦教授 第4週「多彩な生命科学・基礎と応用」河原秀久教授
コース	「通常コース（無料）」「反転学習コース（有料）」
開講日	10月23日（木）

▶ [「化学生命工学が作る未来」の詳細・受講登録（「gacco」ウェブサイト）](#)

▶ [JMOOCウェブサイト](#)

2014/07/31/ 12:30 UP

[More News](#)

立命館大学における教育の ICT 活用について

1. 立命館大学における教育の ICT 活用の現状

(1) RAINBOW (Ritsumeikan Academic Information Network Bridging Our World) :
立命館統合情報システム

- RAINBOW ネットワーク・無線 LAN の整備、遠隔講義システム
- 情報教室、マルチメディアルーム、一般講義室のマルチメディア対応
- メディアラボ/デジタル教材作成室の整備

(2) manaba+R

- 小テスト、レポート、アンケートの出題と採点
- 教材・コンテンツの配布（動画を含む）
- 掲示板（ディスカッション）、授業計画表
- ポートフォリオ（成果物の蓄積）
- 出席・クリッカー機能
- 授業アンケート

(3) その他

- オンデマンド授業：2008 年度より実施、4 科目を開発・提供したが、2015 年度で全科目の廃止が決定している。
- オープンコースウェア：2007 年度より公開開始、14 科目を公開しているが 2008 年度以降の更新なし。
- MOOCs：2014 年度に JMOOCs に参加し、「歴史年京都の文化・景観・伝統工芸」を公開
- 校務支援システムとして‘CCAMPUS WEB’を運用
- 個別の取組

2. 立命館大学における教育の ICT 活用の課題

- manaba+R の利用率の向上（現在 1,000 アクセス以上は 16%）
- manaba+R の機能の充実（授業毎の支援ツールであり学生のトータルな学習支援ができない。）
- 教員の ICT 活用力量の向上
- 学生の情報リテラシーの不足への対応
- ICT 活用支援体制の整備

3. 立命館大学における教育の ICT 活用を推進するための施策（提案）

(1) 主体的な学びを促進する ICT 活用

- 授業中のアクティブラーニングを支援するための授業外学修の仕組（教材・学修コン

テンツの事前配布、反転授業)

- クリッカー機能（レスポンスツール）を活用した双方向授業
- 電子書籍・デジタルペーパーの普及・活用
- VOD 授業の開発

(2) グローバルな学びを支援する ICT 活用

- 留学中の学びの継続を支援する遠隔講義・多拠点講義
- ICT を活用した共同学位プログラム・国際単位互換制度開発
- 大学入学までに情報教育未修の留学生を対象とした ICT 基礎プログラムの開発（英語での授業実施支援、英語による教材・機器整備を含む）

(3) 正課外プログラム・学修支援での ICT 活用

- リメディアル（自学自習+コーチング）プログラムの開発
- 授業後の復習のための授業コンテンツ配信
- 課外活動コミュニティの活用
- ポートフォリオを活用した総合的学習・学修支援

4. 立命館大学における教育の ICT 活用を推進するための体制（提案）

(1) ICT 活用推進体制の整備：教育開発推進機構に「教育の ICT 活用部会」を設置

- ICT を活用した教育・学修支援：manaba+R 活用促進、ICT 教材・コンテンツ作成・授業支援
- ICT 活用のための教員の職能開発（FD）
- 情報基盤整理

(2) ICT 活用推進のための専門的人材の育成と配置

(3) ICT の安定的運用体制の整備

【活用事例集より】

(1) Learning Management System(LMS)

立命館大学では manaba+R という LMS を 2013 年度から導入している。LMS はレジュメ配布、レポート課題提出など授業で活用できる機能を提供しており、インターネット上の仮想教室である。授業単位での ICT 活用事例として、学生の授業外の学修やコミュニケーションのツールとして活用いただきたい。

○立命館大学では、manaba+R の出席・クリッカー機能を活用し、授業中の学生とのコミュニケーションに活用している。このクリッカー機能では、①出席、②クエスチョン（クリッカー）、③アンケートを活用でき、授業中に学生の理解度を確認することや、学生からのコメントの収集に活用できるものとなっている。

[参考]

manaba+R サポートページ「出席・クリッカー機能マニュアル」

(http://www.ritsumei.ac.jp/acd/mr/rio/ritsonly/ct_gakunai/data/attend-manual-teacherJa.pdf)

(2) 反転授業

授業時間外にデジタル教材等により知識習得を済ませ、教室では知識確認や問題解決学修を行う授業形態のこと。タブレット端末やデジタル教材、インターネット環境など情報通信技術（ICT）を活用した反転授業の教育実践が広がっている。反転授業の導入によって、学修時間を増やし教室内で知識を「使う」活動を促し、学修の進度を早め学修効果を向上させることが期待される。

○立命館大学スポーツ健康科学部では、学部 1 回生の英語困難層に対して「英語 P0」プログラムを実施している。このプログラムでは、「反転学修」を導入しており、受講生達は manaba+R にて事前課題と動画の資料を行い、その後授業を受ける仕組みとなっている。

[参考]

スポ健英語学習ナビ (<http://pep-rg.jp/navi/>)

(3) 新しい教材の活用（電子書籍・デジタルペーパー）

欧米を中心に電子書籍の普及が進んでおり、国内においてもメーカーと大学間で実験が行われるなどの動きを見せている。また、デジタルペーパーなどの新しいデバイスが登場するなど、ICT を活用した新たな教材の利用を試みる取り組みが目立っている。

○立命館大学では、2013 年 4 月から文学部のテーマリサーチ型ゼミナール「デジタル環境下における出版ビジネスと図書館」（担当教員：湯浅俊彦、受講生 9 名）において、教科

【B】立命館

書である『電子出版学入門〈改訂3版〉』（湯浅俊彦著、2013年3月刊、出版メディアパル）をこの取組みのために電子書籍化し、8大学（慶應義塾大学、大阪大学、神戸大学、東京大学、名古屋大学、奈良先端科学技術大学院大学、福井大学、立命館大学）が共同で行ったBookLooper（京セラコミュニケーションシステムと京セラ丸善システムインテグレーションが共同開発した電子書籍配信サービス）を活用した「電子学術書共同利用実証実験」に参加した。2014年4月からは文学部で本契約し、授業で利用するタイトルをゼミ生に提供している。

[参考]

湯浅俊彦『デジタル環境下における出版ビジネスと図書館ードキュメント「立命館大学文学部湯浅ゼミ」』（出版メディアパル、2014年4月刊）

(<http://www.murapal.com/denshi/163-2014-02-11-01-43-07.html>)

「日本の大学初、立命館大学を含む8大学による電子書籍の総合的実証実験の開始」

(http://www.ritsumeiji.jp/news/detail_j/topics/12206/year/2013)

○立命館大学では政策科学部においてSONY社のデジタルペーパーを用いた実証実験が行われた。講義では、主として学生の手書き情報に着目し、外国語文章読解、手書き機能を活かせる絵や図を用いた文章やノートの作成、ネットワーク機能を利用した講義資料配布および講義ノートやレポート等の提出・回収、模擬試験、グループワークなどを行った。

本端末および関連する教育支援ソリューションシステムを利用することにより、教員と学生とが学習過程を互いに把握すること、教育や研究の指導や相談を支援する有益なツールとなる可能性を確認できた。また、本端末はフィールドワークやグループワークなどの場において、教員・学生間だけでなく学生同士の情報共有や情報交換にも有効であり、アクティブラーニングの効果を高めるツールとしての可能性を有していることも確認できた。

[参考]

森隆知「手書き情報に着目した教育ツールとしての電子ペーパーの可能性」

（日本画像学会 2014年度第4回技術研究会）

[参考]

SONY「デジタルペーパーウェブサイト」

(<http://www.sony.jp/digital-paper/>)

テーマC

2013年度後半期活動報告【地域別企画(西日本地域)】

JPFF地域別企画(西日本地域)

関西大学FDフォーラムを開催しました

関西大学
教育開発支援センター副センター長
教育推進部

三浦 真琴

2014年1月25日、全国私立大学FD連携フォーラムとの共催・関西地区FD連絡協議会の協賛の下に第10回関西大学FDフォーラムが開催されました。今回のテーマ『アクティブラーニングとはじめ at & from Kansai University』は可能性と課題が明らかになってきたアクティブラーニングについて原点から考え直し、関西大学で展開されている授業実践について報告し、これを機にアクティブラーニングの輪を学内外に広げていくことを「ねらい」と「ねがい」としたものです。当日は、全国の大学等から64名の参加をいただきました。第一部の基調講演、能動的な学生の取り組みを伝える第二部のポスターセッションを経たのち、参加者からの質問や意見、感想などをフィードバックする時間を第三部に持ちました。

語義にしたがえばアクティブラーニングは行為・動作、あるいは状態・態度を示すものであり、その動作や態度への到達が目標として設定され、その目標を実現するために手法が編まれ、方略が組まれますが、2012年の中教審答申がこれを手法の総称として定義したため、ノウハウやチップス、マニュアルの作成や入手に汲々とする傾向が生まれています。基調

講演で演者はこのことへの警鐘を鳴らし、“teaching(teacher-centered)からlearning(student-centered)へ”というパラダイムシフトに与するならばアクティブラーニングを実現するためには先ず学生をどのような学習者に育てたいのかという哲学的思惟が必要であると訴え、特に初年次における「問い」の構造や拡がり・奥行きを学ぶ体験がその後の「学び」をより充実したものにする可能性があるとして、「問い」を学生自らが発見・発掘する「学問モデル」が有用であると報告しました。

第二部ではこの学問モデルを支援するLA(Learning Assistant)、コラボレーション・コモンズでラーニングカフェを開催するLA、ライティングラボで学生の支援をするTA、シラバスや担当教員など包括的に科目をデザインして開設を提案する科目提案学生委員等の取り組みが紹介され、参加者からの質疑やコメントで会場は熱気に包まれました。また学生を主体的・能動的にするための情報や知見を交換し、創出し、共有するネットワーク(ALN)の開設も呼び掛けられました。

✉ 問い合わせはaln@ml.kandai.jpまで。

当日のプログラム

日時：2014年1月25日(土) 13:00～17:30

場所：関西大学千里山キャンパス

第2学舎2号館C304/C301教室

13:00	開会挨拶 教育推進部長・副学長・経済学部教授 林 宏昭
13:10	基調講演 教育開発支援センター副センター長・教育推進部教授 三浦 真琴
14:30	ポスターセッション
16:30	フィードバック



初年次生を対象にした授業外ライティング講座を開講

大学間連携共同教育推進事業の取組の一環として、ライティングラボでは昨年度に引き続き、初年次生を主対象に授業外のライティング講座を開講しています。

今年度春学期は、「レポートの書き方ワンポイント講座」と題した授業外講座を千里山、高槻ミューズ、堺の各キャンパスで行いました（主担当：小林至道特任助教）。開講回数は、それぞれ9回、3回、1回で、合計すると200名以上の学生が受講しました。なお、高槻ミューズおよび堺キャンパスでの

開講は、今後の本格的な全学展開を見据えた試みです。

秋学期も、千里山および堺キャンパスで授業外講座を開講しています。ただし、講座名は「文章表現ワンポイント講座」で、春学期と異なります。それは、春学期はレポート作成能力の育成に特化した講座であったのに対し、秋学期は汎用的ライティング能力の育成を目標にした講座であることによります。千里山キャンパスで行った講座の日時、内容等は、次のとおりです（担当：林田）。

第1回	10月 8日	12:20～12:50	文章の基礎（1）なぜ伝わりにくいのか？	第1学舎1号館5階
第2回	10月15日	12:20～12:50	文章の基礎（2）文章のタイプ	第1学舎1号館5階
第3回	10月22日	12:20～12:50	文章の基礎（3）レポートとは何か？	第1学舎1号館5階
第4回	11月12日	12:20～12:50	文章を読む（1）読み方のいろいろ	第1学舎1号館5階
第5回	11月19日	12:20～12:50	文章を読む（2）ショートショートを読む（初級編）	第1学舎1号館5階
第6回	11月26日	12:20～12:50	文章を読む（3）ショートショートを読む（上級編）	第1学舎1号館5階
第7回	12月 3日	12:20～12:50	レポートを書く（1）全体の構成	第1学舎1号館5階
第8回	12月10日	12:20～12:50	レポートを書く（2）段落の構成	第1学舎1号館5階
第9回	12月17日	12:20～12:50	レポートを書く（3）引用の方法	第1学舎1号館5階

来年度も、ライティングに関する授業外講座を開講します。本講座をより有意義なものにするため、教職員の皆様におかれま

しても、さらなるご支援、ご鞭撻の程お願い申し上げます。

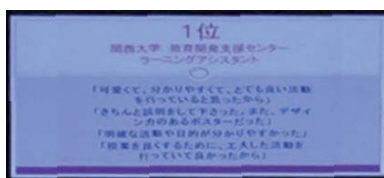
（教育推進部 林田定男）

学生FDサミットに参加しました！

2013年夏の学生FDサミットが、8月24日、25日に、立命館大学衣笠キャンパスで、「大学を変える、学生が変わる」をテーマに行われました。北は北海道から南は鹿児島まで総勢49の学生団体が集まりました。学生FDサミットとは自分たちの大学や授業をより良いものにしていこうという活動をしている学生や教職員が集まって、活動を共有したり、意見を交換したりする場です。私たちLA（ラーニングアシスタント）も、参加し、他学の学生たちとディスカッションし、LAの日々の活動をポスターセッションで発表報告してきました。各大学の学生団体の活動の様子はポスターセッションという形で発表されました。

関西大学のLAもポスターセッションで発表しました。私たちのポスターは「一目でLAの活動が伝わり、つい見たくなる楽しいデザイン」にすることを心がけました。そのため、活動を花やミツバチなどに例えて表現したり、画用紙を切り貼ったり、文字よりも絵を多く描くようにし、手づくり感たっぷりの温かみのあるものを準備して臨みました。

当日はそのポスターが好評をいただ



ポスター総選挙で1位獲得

き、ポスターセッションに参加した45団体で競う「ポスター総選挙」で、なんと、1位に選ばれました。

FDサミットに参加するという機会に、ポスターセッションの準備をLAの仲間たちと準備をしていく作業を通じて、これまでのLA活動についてもふり



ポスターの前で熱弁するLA

かえり、改めて考えることができました。と同時に、たくさんの他大学の学生や教職員の方々と意見を交換し、いろいろな大学の活動を共有することができました。このような貴重な経験を糧にしつつ、これからも本学でのLAのあり方について考え、LA活動に取り組んでいきたいと思っています。（参加LA一同：文学部4回生 牧野晃大、商学部4回生 藤本夏子、文学部3回生 山本綾香、社会学部3回生 大谷智美、社会学部3回生 高橋海咲、社会学部2回生 浦野亮太）

（教育推進部 山本敏幸）



Learning Assistant

LA活動報告

授業を“創って”みませんか？

関西大学では現在「**科目提案学生委員**」を募集中です。
関大に欲しかったあんな科目、こんな科目・・・
あなたが受けたかったそんな授業を、自分たちの手で
デザインしてみませんか？

もっと大学と
関わりたい！
大学を知りたい！

関大の「看板科目」
を自分たちで！

科目提案学生委員会は
そんなあなたを
お待ちしております！

新しい仲間と
新しいことが
したい！

将来は
大学の教職員に！

お申込み

志望理由書(500字程度・様式自由)を作成し、
下記問い合わせ先担当者宛に、志望理由書を添付し
たメールを送ってください。

受付期間

2014年6月30日（月）まで

問い合わせ先

教務事務グループ科目提案学生委員会担当（澤）
Tel 06-6368-1111（内線:2823）
Mail ku-kamokuteian@ml.kandai.jp

学生が選ぶ ベストティーチャー賞 受賞者発表

学生のみなさん たくさんの投票ありがとうございました。
みなさんの投票により、以下の先生方が
「学生が選ぶベストティーチャー」として選ばれました。

おめでとうございます



最高票数獲得賞：岡崎 昌之
(現代福祉学部)

以下五十音順

網野	禎昭 (デザイン工学部)	木下	訓光 (スポーツ健康学部)
後藤	一美 (法学部)	斉藤	利通 (理工学部)
鈴木	靖 (国際文化学部)	鈴木	美伸 (総長室特任教員)
善甫	康成 (情報科学部)	高田	雅之 (人間環境学部)
筒井	知彦 (経営学部)	藤代	裕之 (社会学部)

(敬称略)

表彰式は2014年12月25日(木)に行います。

主催：法政大学 教育開発支援機構
協力：「学生が選ぶベストティーチャー賞」企画・実行委員会・学生FDスタッフ、FD推進センター

学生コーディネーター

D-Plus

まいる

JA

TISA

教育開発推進機構主催

2014 年度第 4 回教学実践フォーラム

Assembly for Peer Supporters


2014.12.18(Thu) 18:30-20:00
立命館大学衣笠キャンパス 至徳館 304 東会議室

動画配信：びわこ・くさつキャンパスアクロスウィング7階 TV 会議室/朱雀キャンパス 602 会議室

Agenda

司会・進行：川那部 隆司（教育開発推進機構 准教授）

18:30 - 18:35 開会の挨拶

沖 裕貴（教育開発推進機構 教授）

18:35 - 18:50 APS の取り組み -APS2013 での気づきと APS2014 開催までの経緯-

18:50 - 19:05 APS2014 の取り組み -ピア・サポートマップとピア・サポーターズプロフィールの完成まで-

19:05 - 19:15 ピア・サポーターによる連携のアイデア 事例 1

19:15 - 19:25 ピア・サポーターによる連携のアイデア 事例 2

19:25 - 19:40 本学のピア・サポート活動、APS の取り組みについてのコメント

桑名 恵（共通教育推進機構 准教授）

19:40 - 19:55 意見交換

19:55 - 20:00 総評・閉会の挨拶

土岐 智賀子（教育開発推進機構 講師）

Peer Supporters

【オリター】 小林 智裕（文）、松永 京美（経営）、荒木 裕香子（生薬）

【学生広報スタッフ】 山内 快

【学生コーディネーター】 梅原 聡

【JA(ジュニア・アドバイザー)】 木村 優一、平野 俊祐、坂井 勇太

【障害学生支援室サポートスタッフ】 小出 優子、加納 理紗

【GGP 学生支援団体 まいる】 川瀬 佑治

【D-Plus(産業社会学部デジタル工房スタッフ)】 荻野 一樹

【入試広報学生スタッフ】 林 柚季

【ライブラリー・スタッフ】 濱田 紳吾、品川 由衣

【留学アドバイザー】 牧野 健吾

【留学生チューター TISA】 金 昇淵

【RAINBOW STAFF】 吉田 健司、猪田 友、栗山 拓

企画・運営

【学生 FD スタッフ】 井上 範子（産業社会学部 4 回生）、田村 友里（文学部 3 回生）

広地 慶庵（文学部 4 回生）、小黑 恵太郎（経営学部 4 回生）、三輪 仁志（文学部卒業生）

オリター・エンター

APS2013 から APS2014 への道のり

Assembly for Peer Supporters(APS) とは？

立命館大学に所属する学生ピア・サポート団体が、一同に集い、学内のピア・サポート活動向上について話し合う集まり。2013 年秋から冬にかけて、立命館大学 教育開発推進機構の教職員が中心となり、初めて実施された。学生同士の学びあいを行っている活動団体(以下、ピアサポート団体)の代表者が、数回のワークショップを通じ、ピア・サポート活動に関するテーマについて、提案や提言を行っていくことが大きな目的とされている。また、普段はあまり関わることのない団体同士の相互的な交流の場を提供しており、継続的な実施を目指している。

本年度は、学生 FD スタッフが企画の運営を担うこととなり、「学生の 学生による 学生のための活動」が動き出したと言える。

APS2013 から APS2014 へ

APS2013 での発見：連携の必要性への「気づき」⇒APS2014 では、「気づき」を「具体化」する必要がある。

Assembly for Peer Supporters 2013 について

報告日時：2013 年 12 月 12 日(木) 18:30~20:00

報告場所：立命館大学 衣笠キャンパス 創思館カンファレンスホール(動画配信@BKC P109 教室)

ワークショップ実施回数：3 回

参加団体：13 団体(15 名)

以下 参加団体一覧(順不同)

- | | | |
|------------------|--------------|----------------|
| ・オリター/エンター | ・ES(教育サポーター) | ・ライブラリースタッフ |
| ・JA | ・留学アドバイザー | ・留学生チューターTISA |
| ・D-plus | ・学生 FD スタッフ | ・GGP 学生支援団体まいる |
| ・学生広報スタッフ | ・入試広報学生スタッフ | ・学生コーディネーター |
| ・障害学生支援室サポートスタッフ | | |



(昨年度の様子)

APS2013 のねらい

- ① 団体間で情報を共有し、横の繋がりを形成すること
- ② 立命館大学におけるピア・サポーターとしての資質を発見、発信すること

APS2013 ワークショップの成果

APS2013では、3回のワークショップを通して、立命館大学のピア・サポーターに求められる資質について話し合った。その中で、各団体の活動状況を振り返り共有することを行った。

第一回では、自分達の活動を可視化して客観的に見えるようにした。

第二回では、その可視化した活動を基に、ピア・サポーターに求められる資質について話し合った。

第三回では、活動を個人レベルと団体レベルに分けて、組織としての力と個人としての力を考察し、学内でのピア・サポート団体の位置付けについて話し合った。

以下、詳細。

第1回WS

日時：2013年10月24日（木）

目的：ピア・サポート活動の分類と可視化

ワークショップで取り組んだこと：縦軸と横軸の項目を自由に設定し、自分達の活動を位置付ける。

収穫

- | | | |
|---|---|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ・正課と正課外での対象者へのサポート ・サポートを実践する場と準備の場の存在 | } | <p><u>組織力だけではなく、個のニーズに応えられる</u></p> <p><u>個人の主体的な準備と参画が必要</u></p> |
|---|---|---|

ワークショップでの成果資料

ピア・サポーターの活動

サポートの準備	正課		サポートの場
	【正課】サポートの準備	【正課】サポートの場	
	・イベントの立案	・レポート作成講座	
	・取材	・履修相談	
	【正課外】サポートの準備	【正課外】サポートの場	
	・勉強会	・留学相談	
	・研修会	・ボランティア支援	
	・スタッフ交流会	・就活相談	
		・オリエンテーション企画	
	正課外		
	R RITSUMEIKAN		

(APS2013 報告会資料より引用)

第2回WS

日時：2013年11月14日（木）

目的：ピア・サポーターに求められる資質の発見(スキル、知識、態度、心構えなど)

ワークショップで取り組んだこと：ポストイットを使用し、各々が必要だと思う資質を書き出し、分類した。

収穫

《多様な活動実施に求められるスキル》

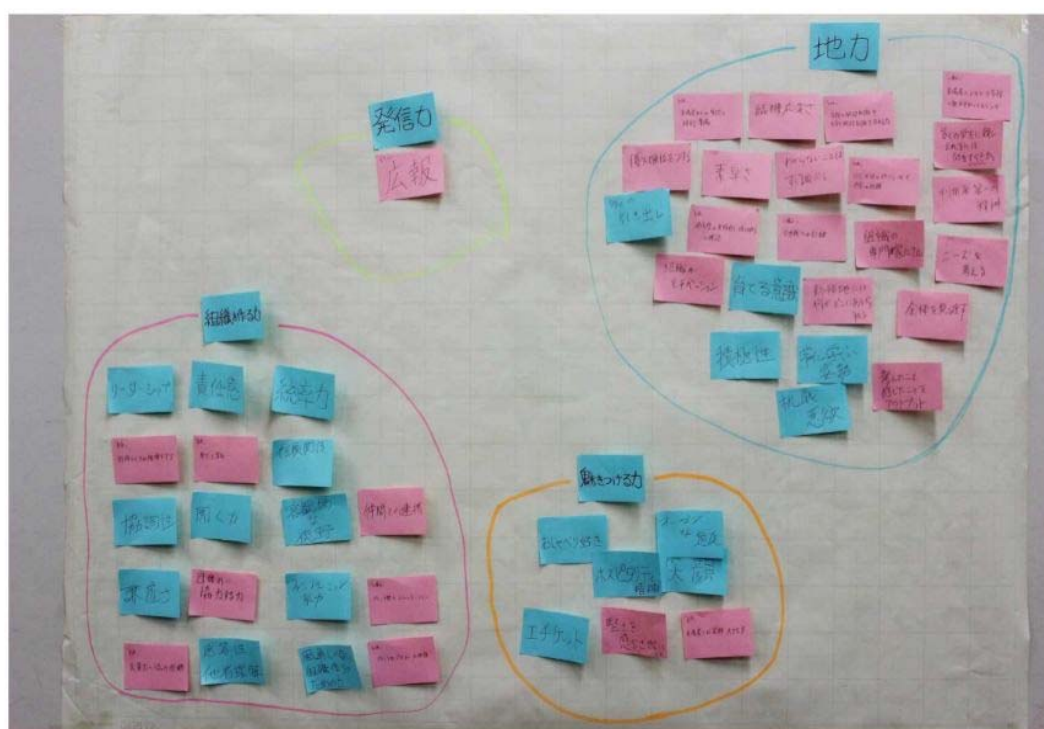
傾聴力、専門知識、コミュニケーション能力、主体性 etc...

《持続するために必要な力》

広報、目的の意識化、企画力、実行力、プレゼン能力 etc...

⇒活動内容は多岐に渡っているが、ピア・サポーターに求められる「ニーズへの対応力」（学生、教職員のニーズを正確に把握し、それに応じていく力）を中心に共通している。

ワークショップでの成果資料



第3回WS

日時：2013年11月26日（火）

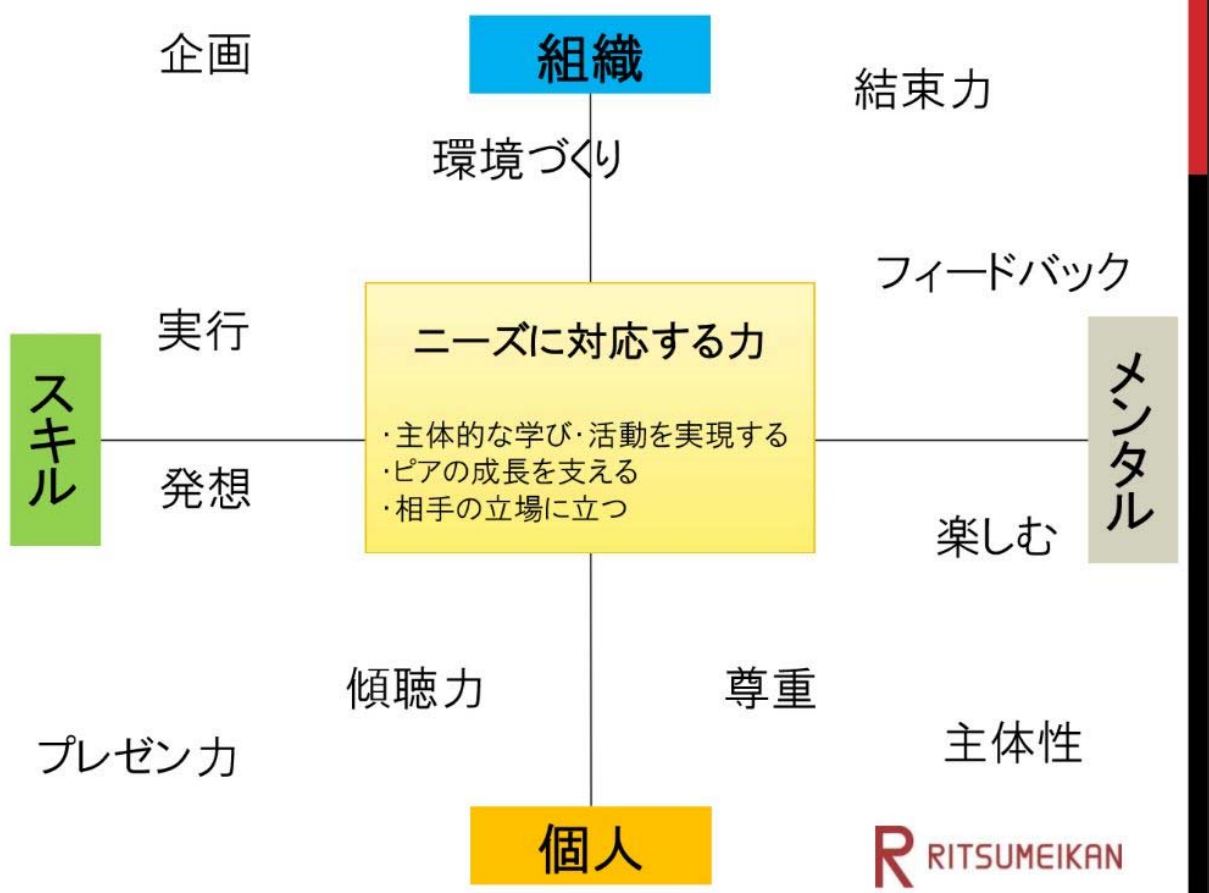
目的：第1回、第2回の内容を踏まえて、現状を分析する。

ワークショップで取り組んだこと：参加者全員で、資質を組織レベルと個人レベルに分け、学内でのピア・サポート活動の流れを分析した。

収穫・課題

《4つの資質》

- 1、組織・・・企画力、環境づくり、結束力
- 2、個人・・・傾聴力、相手への尊重、主体性
- 3、知識やスキル・・・プレゼン力、実行力、発想力
- 4、メンタル・・・楽しむ、フィードバック



(APS2013 報告会資料より引用)

《団体同士の関係性》

一つの団体内で、ニーズをくみ取り、発信は出来ている。

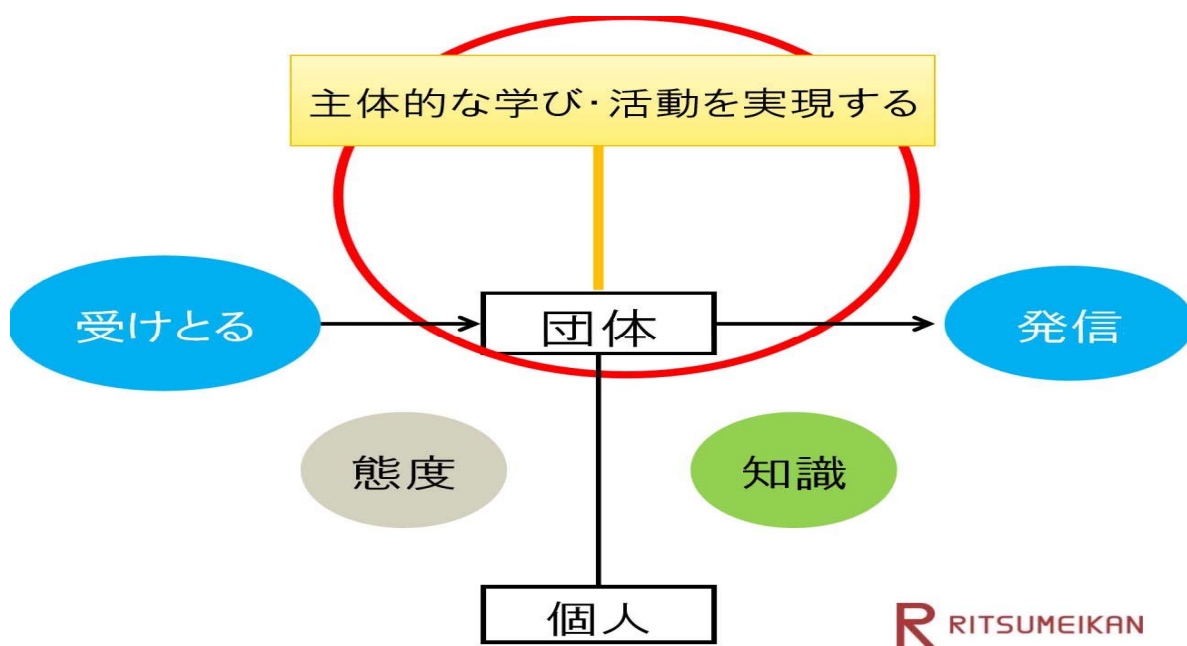
団体間の情報共有がほとんどない。

《教職員との関係性》

主体的な学びや成長を達成するためのやり取りが不十分。

(活動などの中で重視されていないのでは?)

連携の架け橋が
必要



連携への架け橋づくりに向けて

APS2013 から得られた立命館大学におけるピア・サポーターの資質。

- ① ニーズを適切に受け取り、サポートとして発信出来ること
- ② 学生同士の学びと成長の輪を広げること

さらなる向上のために...

連携(教職+学生協働)が必要である。という「気づき」

「気づき」を「実践」にまで引き上げるための提言が、Assebmly for Peer Supporters 2014。

APS2013-2014 へのステップアップ

APS2013・APS2014 の大きな違い

企画・運営が、教職員主体から**学生主体**へ変わったこと

「学生」から「学生」へのアプローチの実現 …… より学生ならではの視点での連携のアイディアを提案することが出来た

APS2014 企画メンバー

学生 FD スタッフ 2 名、APS2013 参加者 3 名

(オリター団団長、留学支援団体リーダー、学生コーディネーター経験者)

そもそも…学生 F D スタッフとは

大学教育の質向上のために、教員・職員とともに協働していく学生組織。

2014 年度は「授業アンケート」と「ピア・サポート」をテーマとし、それぞれの活動を進めている。

学生 F D スタッフの問題意識 –なぜピア・サポートを調査テーマとしたか

ピア・サポート団体の「散在」

立命館大学では、3,000 名以上の学生がピア・サポートに従事しており、様々なピア・サポート団体が存在している

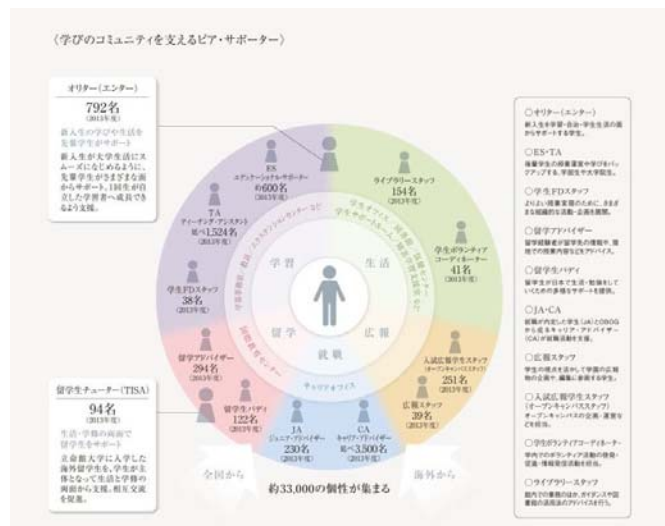
→しかし、どんな団体が、どこで、どのような活動をしているのかを一覧する手段はない

課題

- 学生生活の中での悩みを解決するために誰に頼ればいいのか、どこへ行けばいいのか不透明なのではないか
- 充実したサポート体制を有効に活用できていないのではないか

どうすれば課題を解決できるのか？

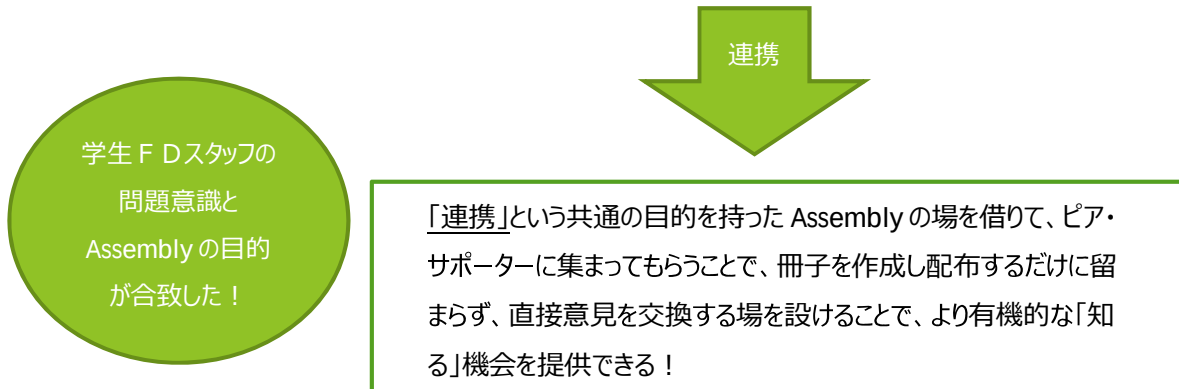
ピア・サポート団体を「知る」ための**道具**を作りたい！



課題解決のアイデア

ピア・サポート団体を紹介する冊子の作成を考える

- 支援対象、活動場所、活動内容等の支援対象、活動場所、活動内容等の情報を盛り込んだ資料を作成できれば上記の問題を解決できるはず
- 団体が利用することで他団体の活動を知ることができ、団体間の連携の一助となることも期待できる



連携の必要性を見出した APS2013 からのステップアップを図ることが出来るのでは？

→冊子だけではなく、連携するためのより具体的な策を模索する段階へ

APS2014 での到達点

Assembly for Peer Supporters 2014 について

報告日時：2014 年 12 月 18 日(木) 18:30~20:00 (本日)

報告場所：立命館大学 衣笠キャンパス 至徳館東 304 会議室

(動画配信@BKC アクロス 7 階会議室、朱雀 602 会議室、APU 第 3 回儀室)

ワークショップ実施回数：3 回

参加団体：12 団体(19 名)

以下 参加団体一覧(順不同)

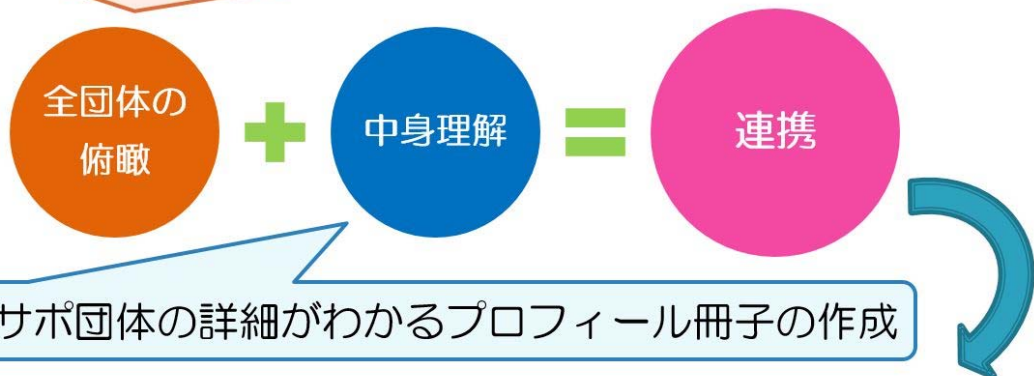
- | | | |
|------------------|---------------------------------|----------------|
| ・オリター/エンター | ・ライブラリースタッフ | ・RAINBOW STAFF |
| ・JA | ・留学アドバイザー | ・留学生チューター-TISA |
| ・D-plus | ・学生 FD スタッフ | ・GGP 学生支援団体まいる |
| ・学生広報スタッフ | ・入試広報学生スタッフ | ・学生コーディネーター |
| ・障害学生支援室サポートスタッフ | (うち ES (教育サポーター) を兼任する学生が複数名いる) | |

APS2014 のねらい

APS2013 での気づきから、ピア・サポーター同士の連携の具体策を提案する

到達点

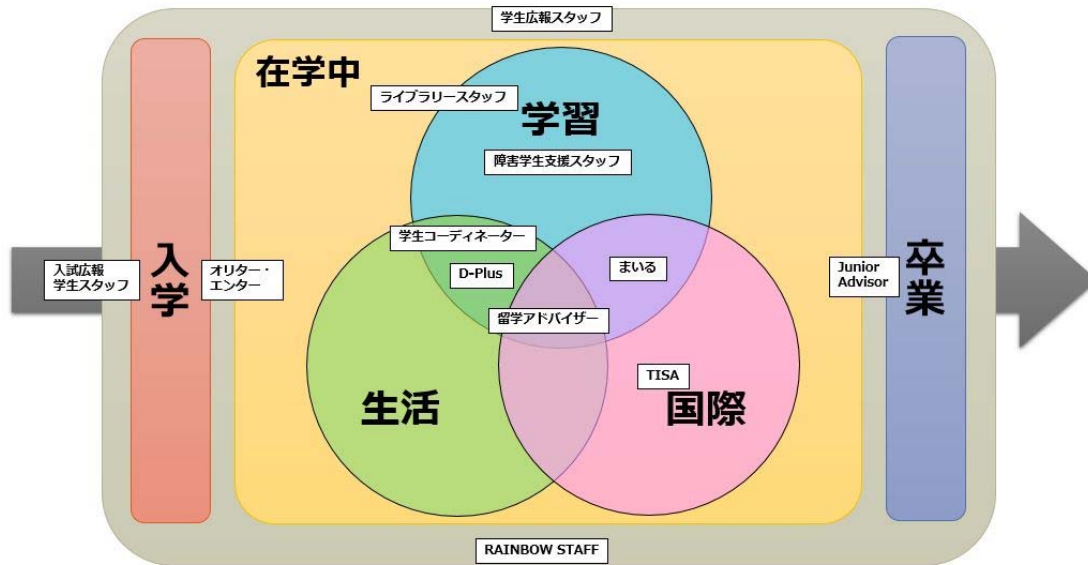
ピアサポ団体の全体像を示す“ピア・サポートマップ”の作成



**ピア・サポート団体による
連携のアイディアの提案**

-40-

ピア・サポート・マップ



ピア・サポート・マップが出来るまで

1. 時系列をマップに組み込む

5 分類には時間に概念が含まれていない。支援を受ける側の学生にとって、より役立つ支援を提供していくためには、彼らの学生生活に即した考え方が必要だと考えられる。そこで「入学」「在学中」「卒業」の 3 つのポイントに学生時代を区分した。

2. 活動の再分類

5 分類のうち、「学習」「生活」「国際」を学生時代の主な活動として、再分類を行った。

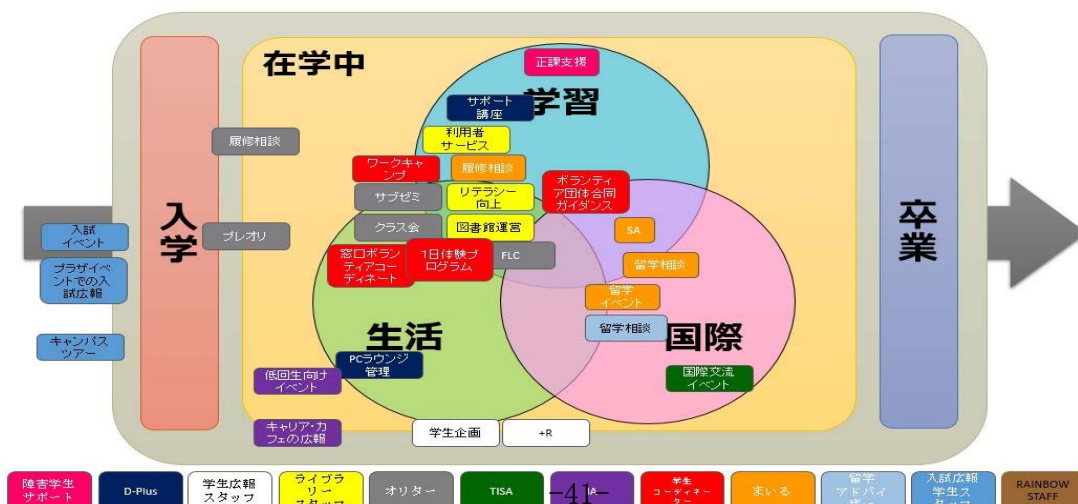
「広報」については、学生時代（およびその前後）にも行われている活動のため、3 つの時系列の区分にかかるように設定した。（マップのグレーの網掛け部分）

「進路」については、「卒業」前の選択であることから、卒業に吸収することにした。

それぞれ重なりあっている分類は双方に関わりあっており、連携の可能性があることを示すマップ作成に努めた。

3. ピア・サポート活動の再マッピング

1. 2 の過程を経て完成したマップを土台に、ピア・サポート活動の再マッピングを行った。（下図）前述した 5 分類グラフと同様に、活動の概ね中心となる位置にピア・サポート団体を、位置を定めたものを完成版とした。



ピア・サポート・マップに残された課題

課題①ピア・サポート活動内容を詳しく反映することが出来ていない

マップを「わかりやすく」可視化するための工夫として、シンプルさを重視した。そのため、それぞれの活動内容がマップには反映されていない。

解決策

後述する「ピア・サポート・プロフィール」との併用

「ピア・サポート・プロフィール」は、連携することを念頭に作成した。活動内容についても、連携する際に強みになること（GIVE）を中心に記載をしている。強みとは、具体的には自団体が他の団体と比べて、特に得意とする支援を指す。これを明記したプロフィールとマップとを併用することで、より有機的かつ効率的な連携の可能性について模索することができる

課題②活動時期を具体的に反映できていない

時系列の「在学中」については、学年によって学習環境や抱える課題が大きく異なることから、より細分化した時間軸の設定が必要である。

解決策

「在学中」の区分を「1 回生前期」「1 回生後期」などに細分化し、ピア・サポート団体が支援を行うタイミングをより具体化した付随資料の検討が必要である。また「入学」前、あるいは「卒業」後にも、支援範囲が及ぶことを考慮し、新たな細分化項目を加えることも検討する必要がある。

第 2 回WS「理解する」-ピア・サポート・プロフィールの作成

日時：2014 年 11 月 14 日（金）

目的：連携するために必要となる情報・要素について考える。

ワークショップで取り組んだこと：

・ピア・サポート・マップに関する意見集約

第 1 回 WS で述べたとおり。

・ピア・サポート・プロフィールのコンテンツ検討

WS 開催にあたり、事前に「活動紹介シート」の記入を促した（右図）

「活動紹介シート」は基本的な団体情報を記入するだけのものであり、連携・つながりを連想させるものではない。

なお、この「活動紹介シート」は、前述したピア・サポート・マップの基礎資料と

Assembly for Peer Supporters

1. 団体名

2. 活動理念・目標・目的

3. 活動紹介

活動名	活動内容		

APS2014 の取り組み-ピア・サポートマップとピア・サポートプロフィールの完成まで-
学生 FD スタッフ 産業社会学部 4 回生 井上 範子

2つのグループに分かれ、連携するために必要となる情報とは何か、また連携を深めることが出来る資料とは何か、について議論した。その結果、「GIVE」（団体の得意な活動/連携する際に強みとなる活動）「TAKE」（団体に不足している活動/連携する際に他団体に協力を求めたい活動/連携してみたい活動）をはじめ、上記の目的に対応した項目が挙げられた。議論をまとめたものが、以下のコンテンツである。

団体名称	サポート対象：支援対象 創立年：団体が支援された年 活動場所：主に支援を行っている場所、活動メンバーが集う場所等 連絡先：連携のための連絡を行う場合のコンタクト先 (大学連絡先、団体代表連絡先等)	
SSRS		所属：〇〇〇課
サポート対象	立命館大学に在籍する初年次生（留学生を含む）	
創立年	1990 年	
活動場所	KIC:カンファレンスホール、BKC：ユニオンスクエア	
連絡先	〇〇〇課 075-〇△×—〇△×	

所属する大学の部署

活動理念	主な活動・年間表	ピア・サポートマップでの位置づけ
- 立命館大学における学びを深く理解し、実践する - 入学生に対して、大学生活の様々な情報を提供し、定着をサポートする - 立命館大学が掲げている理念	2月 運営体制発足（全回生から募集・先行） 4月 新入生向けオリエンテーションの実施 5月～9月 新生活イベントの開催 10月～12月 学年末イベントの開催 1月～3月 新年会・歓迎会の開催 4月～6月 夏休みイベントの開催 7月～9月 秋学期イベントの開催 10月～12月 冬学期イベントの開催 1月～3月 新年会・歓迎会の開催 4月～6月 夏休みイベントの開催 7月～9月 秋学期イベントの開催 10月～12月 冬学期イベントの開催	
GIVE…アピールポイント	TAKE…連携してみたいこと	
マネージメント力に長けています。オリエンテーションなど、初年度に行っているため、長期的な目標設定と遂行についてのノウハウを持っています。	細かいニーズに対応できる専門性を求めています。オリエンテーションなど、初年度に行っているため、長期的な目標設定と遂行についてのノウハウを持っています。	

第 3 回 W S「連携する」-提案書の作成

日時：2014 年 11 月 28 日（金）

目的：ピア・サポート・マップと、プロフィールを活用し、具体的な連携について考える。

ワークショップで取り組んだこと：

・提案書の作成

任意のピア・サポート団体で構成された 4 グループに分かれ、ピア・サポート・マップとプロフィールを活用しつつ、具体的な連携のアイディアについて議論を行った。その後、各グループによる報告会を行った。



提案テーマ一覧（別紙：提案書参照）

	企画タイトル	提案テーマ内容	メンバー
A	新入生、壁を越えて仲良くなろうぜ！（Beyond Borders）	新入生と留学生を対象とした、国際交流イベントを実施する	文オリター 留学生チューターTISA、GGP 学生支援団体まいる JA
B	ピアサポ 1 日体験ツアー	新入生を対象とした、キャンパス内でピア・サポートの模擬体験ツアーを実施する	学生広報スタッフ 留学アドバイザー RAINBOW STAFF
C	Insightful Open Campus （より充実したオープンキャンパスを作ろう）	入学希望者を対象としたオープンキャンパスツアーへのピア・サポート団体の協力・連携企画を実施する	入試広報学生スタッフ 障害学生支援室サポートスタッフ ライブラリー・スタッフ
D	ボランティアでやりたいことみつけよう！	学部新入生を対象とした、ボランティア体験企画の実施	経営オリター 学生コーディネーター D-Plus

「留学」という壁を越える大学づくりの 第一歩、ピア・サポートから

—壁を越える、友達をつくる～Beyond Borders～—

報告：グループ J-GTO

(JA、GGP 学生支援団体、留学生チューターTISA、文学部オリター団)

背景・意義

ピア・サポート活動における問題点（現状）

大学に入り、新たな環境に置かれた新入生にとって、学内でのコミュニティ形成には様々な困難がある。初年次の小集団クラスはコミュニティ形成の最大の手がかりとなるが、クラスの担当オリエンテーション・コンダクター(以下、オリター)や教員とのつながりのみに限定されてしまうことも多い。特に留学生の場合、言葉や文化の壁により、その状況の深刻さはさらに増す。例えば、同じ国や文化圏出身の学生同士だけで閉じたコミュニティを形成してしまうことによって、異なる文化や価値観に触れることができるという留学のメリットが失われたり、学修に対するモチベーションが低下したりする学生もいる。さらに、初年次に形成されたコミュニティが閉じたものである場合、上回生になっても、コミュニティが拡大したり、他のコミュニティと交わったりする機会がなく、学生側も積極的にそうした行動を取ろうとしないという状況が見受けられる。

一方、支援する側であるピア・サポート団体側の活動にも課題が指摘されている。例えば、初年次クラスに入り、新入生の大学への移行やコミュニティ形成を支援するオリターは、そのための様々な企画を実施している。企画自体の効果は一定認められるものの、クラス内への効果に限定されており、クラスを超えたコミュニティ形成への貢献は低い。また、企画に参加していない学生への支援も十分とは言えず、特に留学生に関しては、企画への参加率が低いことが知られている。留学生を対象としたサポート、海外への留学を希望する学生へのサポート、ひいてはキャリア形成に関わるサポートについても、同様のことが言える。これは、数多くのピア・サポート団体による活動が、それぞれのコミュニティに留まり、閉じたコミュニティの形成支援にとどまっていることを意味している。学内に多様なコミュニティが形成されるだけでなく、そうしたコミュニティ同士がつながり合うことによって、多様な学びのコミュニティへの参加を通じた学生の成長が実現されるだろう。

本企画の必要性（意義）

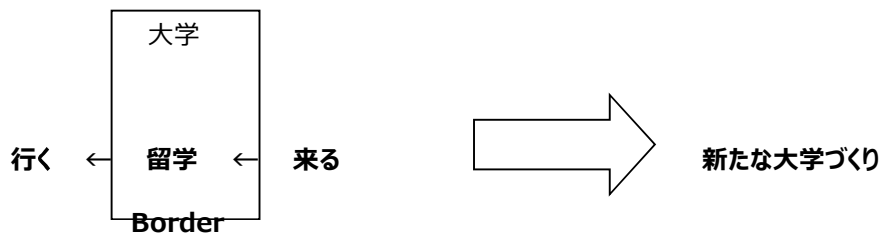
本企画は、新たなコミュニティの形成にとどまらず、コミュニティ間の交流が生じることを目的とし、その機会を提供する。特に交流機会の少ない日本人学生と留学生とが、互いに情報を共有し、刺激を与えあう場を作ることによって、学内の学びのコミュニティの発展を目指す。

そのためには、様々な活動に従事しているピア・サポート団体が培ってきたそれぞれのノウハウを活かす必要がある。特に各団体が高品質の情報をコミュニティ形成を支援するための場作りの経験を組み合わせることで、以下のような効果が期待される。

- ・日本人学生と留学生に対する質の高い情報の提供、充実した大学生活のためのサポート
- ・参加学生とサポート学生の相互成長
- ・複数のピア・サポート団体による実質的な連携プロセスに関する知見の蓄積（持続可能な連携のあり方の検討）
- ・立命館大学におけるピア・サポートの質の向上
- ・多様な学びのコミュニティの創出と学びのコミュニティへの参加を通じた成長の実現

到達目標

「留学」という壁を越える大学づくり



本企画を懸け橋に、さらなる形へ！

企画概要

企画趣旨

壁を越えたコミュニティ形成 + α（届け！私たちのノウハウ！）

TISA 「日本人学生と留学生両方に知ってもらいたい留学生というポジションの現状と将来」

オリター 「日本人学生と留学生、その壁をも越えたコミュニティの形成」

まいる 「早い段階から準備しなければならない長期留学」

JA 「充実した大学生活を送るためのキャリア形成」

企画対象

衣笠キャンパスに在学中の日本人学生(新入生)、及び留学生(学部生)

※留学生においては、前述した現状から全回生を対象とする。

【C】立命館

ピア・サポーターによる連携のアイデア 事例 1

留学生チューターTISA 文学部 3 回生 金 昇淵

企画体制

実施主管：キャリア・センター / JA(ジュニア・アドバイザー)

国際教育センター / GGP 学生支援団体まいる、留学生チューターTISA

各学部自治会 / 各学部オリター団(衣笠キャンパス)

執行委員会：まいる(川瀬ほか 4 人)、TISA(金ほか 3 人)、オリター(小林ほか 5 人)、JA

運営スタッフ：執行委員会を含む、計 20 人(JA 2 人、まいる 2 人、TISA 6 人、オリター 10 人)

参加予定人数：200 人(内、日本人学生 120 人、留学生 80 人。10 人×20 グループ)

日程：4 月中、17：00～20：30

場所：Café Rosso(衣笠キャンパス諒友館地下食堂)

企画内容

企画は、以下の 2 部構成で行う(詳細な時間配分はタイムテーブル参照)。全体の進行を行う司会と、各グループ(全 20 グループ)の補助・促し役として運営スタッフが 1 人ずつ配置される。

第 1 部(ガイダンス)

各団体によるプレゼンテーション形式のガイダンスを行う(PPT 使用)。企画の目的に基づき、各ピア・サポート団体の活動紹介だけでなく、新入生や留学生に的確な情報の提供を心掛ける。

第 2 部(交流会)

第 2 部の交流会は、立食パーティー形式の自由で活気のある雰囲気の中、グループ内でのコミュニケーションを主として行う。まず、自己紹介を兼ねたアイスブレイクの時間を設けつつ、フリートークの形で進める。また、各グループには、参加者(10 人)の中でも事前にこちらから協力を要請した留学経験者(日本人学生)1 名と留学生 1 名がそれぞれ特別ゲストとして含まれるようにする。その特別ゲストを中心に「その国・地域(日本・京都)に留学しようと思った理由」「その大学(立命館)を選んだ理由・特徴」など、留学すること、留学していることの実経験を通じて、ガイダンスの内容をより具体的に知る機会として活用してもらう。グループ内での交流がある程度進行すると、特別ゲストのグループ配置を替え、交流の輪がより広がるように促す。

広報

広報は、留学生向けに CampusWeb・メールリストによる一括送信、新入留学生オリエンテーション(春入学)での公式な宣伝、及び掲示板を活用して行う。

【C】立命館

ピア・サポーターによる連携のアイデア 事例 1

留学生チューターTISA 文学部 3 回生 金 昇淵

日本人学生(新入生)については、各学部オリター団による一括広報・受付という形をとる。

タイムテーブル

17:00 ～ 17:30 第 1 部受付(グループ分け)
17:30 ～ 18:00 ガイダンス(各団体 7 分程度、最大 10 分まで)
18:00 ～ 18:30 第 1 部休憩、及び第 2 部受付(グループ分け)
18:30 ～ 20:30 交流会(立食パーティー)

予算計画

内訳(委細未定)

立食パーティー分(生協発注): ? 円

飲料代: ? 円

備品(紙コップ、名札など): ? 円

計: ? 円

計画案 1(奨学金の申請): 学内の奨学金制度(学びのコミュニティ集団形成助成金)を利用する。

計画案 2(補助金の申請): 参加者(日本人学生・留学生)、運営スタッフを含む全ての企画関係者は、衣笠キャンパス各学部自治会所属の学生である。また、本企画の意義や目的から、学生の「自治」実現のための十分な価値があると判断されるため、オリターを通して正式な予算の申請を行う。但し、オリターだけの企画ではないため、各団体に与えられている活動資金(補助金)の一部を集めることにする。

計画案 3(参加費の徴収): 以上の申請が却下された場合のみ、参加者及び当日の運営スタッフに一定の参加費を集めることで補う。

その他(留意点など)

- ・企画は、基本的に日本語のみで行うが、参加者同士の自由な会話においてはこの限りではない。
- ・食事や飲み物の発注、企画の運営において、参加者の文化的背景への対応を事前に工夫しておく。
- ・政治、人種、宗教など、敏感な国際問題の話題については、摩擦が生じないように注意を払う。

以上

学生団体活性化に向けた交流活動

体験ツアーを通じた学生団体同士の相互交流や学生との接点機会創出

報告：グループ BKC

(学生広報スタッフ、留学アドバイザー、RAINBOW STAFF)

背景・意義

学生団体の「人集め能力」不足

学生の支援を行う団体は立命館大学内には多く存在する。それらの団体は、学生自身が主体となって、学生の大学生活をより良くするための支援活動を行っており、互いに支援し合っていることから、ピア・サポート団体と呼ばれる。例えば、留学経験学生の立場から留学の後押しを行う留学アドバイザー、様々な学生の頑張りを学内に発信することで学生の努力する気持ちを支援する学生広報スタッフ、立命館大学の PC 環境利用支援を全学生に行う RAINBOW STAFF などが挙げられる。しかし、これらの多くの団体は、企画への参加者を集めたり、企画を実施するサポート学生を集めたりすることに共通して問題を抱えている。自身が立案した企画に予想以上に人が集まらず、想定していた効果が得られなかったり、実施する側の人手不足からピア・サポーターに過度な負担が生じたりしている。特に支援する側のピア・サポーターを集めることができていないという問題は深刻であり、上述したピア・サポート団体について例を挙げれば、例えば RAINBOW STAFF は所属員の極端な減少により、活動の大幅な見直しを迫られている。また、留学アドバイザーであれば、日常的な会合に来る所属員が特定のメンバーのみになっており、結果として多くの学生を巻き込むことができないという問題がある。学生に対するピアからの充実した支援を継続的に提供していくためには、その担い手を集め、育成していくことが求められる。

意義

こうした問題の原因は様々考えられるが、その一つとして、多くの学生に対してピア・サポート活動が十分に浸透していないことが挙げられる。実施されているピア・サポート活動の意義や効果に対する理解以前の問題として、そもそもピア・サポート団体の存在自体が認知されていないという課題が指摘されている。各団体が少しでも学生にとって身近な存在となるために、ポスター掲示等の広報活動を展開しているが、掲示物を用いた広報では、もともと興味を持っている学生にしか情報提供ができず、その効果は決して高いとは言えない。学生がピア・サポート活動の意義や効果、活動内容等について理解するために、伝聞によって情報を得るだけでなく、学生自身が団体の活動に実際にに関わり、経験的に知ることができる機会を創出することが有効だと考えられる。こうした方法をとることで、ひいては学生団体の人集め能力不足という問題の解決も可能となるだろう。

到達目標

到達目標は、企画参加者がピア・サポート活動を身近に感じ、活動内容を知ることが出来ることである。今回の企画の新しさは、これまでのポスター等による広報・情報提供ではなく、体験型のピア・サポート団体理解の場の提供にある。本企画では、様々な活動体験を通じ、参加者がピア・サポート団体での活動にどのように関わることができるのかをイメージできる機会を提供していきたいと考える。

企画概要

企画趣旨

ピア・サポート活動をもっと身近に！！

BKC のピア・サポート団体が一同に集い存在感を増すことでより確かな広報を行い、各団体のサポートをより多くの学生にとって身近なものとし、彼らの今後の学生生活に活かしてもらえるようにする。

企画概要

企画対象：BKC に在籍する学生

日程：団体集合交流会：4 月中旬頃

体験交流会：交流会後の予約期間内 ※団体ごとに最低 2 枠は予約枠を設け実施する。

実施体制：実施主体：学生広報スタッフ、留学アドバイザー、RAINBOW STAFF

協力団体：その他のピア・サポート団体

場所：団体集合交流会：セントラルアーク

体験交流会：各団体任意の場所

企画内容

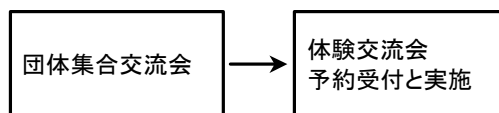


図 1.企画の具体的な流れ

本企画は、団体集合交流会と体験交流会の 2 種類のイベントからなる。団体集合交流会という、過度の緊張感がない場で学生と団体が交流を行い、団体の雰囲気や活動を参加学生が知ったうえで、興味をもった団体の具体的な活動を体験してもらうという流れになる。いずれのイベントもできるだけ多くのピア・サポート団体に参画してもらう。体験交流会終了後には、結果を参画団体で共有する場を設け、その後の団体間連携について検討する機会を設ける。

団体集合交流会

学生と団体の関わりが深まるように、過度の緊張感がない場で学生と団体が交流を行う。参加学生にはなるべく多くの団体と関わってもらえるよう、ブースのような形で団体側が席を構え、参加学生が移動しながら順番に各団体と話をしていく形式をとる。なお、交流会全体の実施時間は参画団体の数によって検討する。

体験交流会

参加学生にピア・サポート団体の活動を詳しく知ってもらい、ピア・サポートをより身近なものとして感じてもらうと同時に、自らが団体の一員として参加することに興味を持つきっかけづくりを行う。体験交流会は、団体ごとで実施の内容、場所、時間に大きな違いが出ると予想されるため、一斉に実施することは困難である。そのため、参画団体のピア・サポーターが自由に場を設定してもらえるようにし、今回の企画として行うのは、各団体の体験交流会の場に向けた参加誘導する。具体的には、参画団体の紹介と体験交流会の予約フォームをまとめたウェブページを作成し、様々な団体を見てみたいと思う学生と参画団体の関わりづくりを行う。

留意点

・実施主体（運営者）の体制

企画開催が 4 月のため、各団体の代表者が確定していない可能性が高い。

・協力団体の参加状況

ピア・サポート団体に本企画への参加をどのように促すか検討が必要である。

以上

参考資料

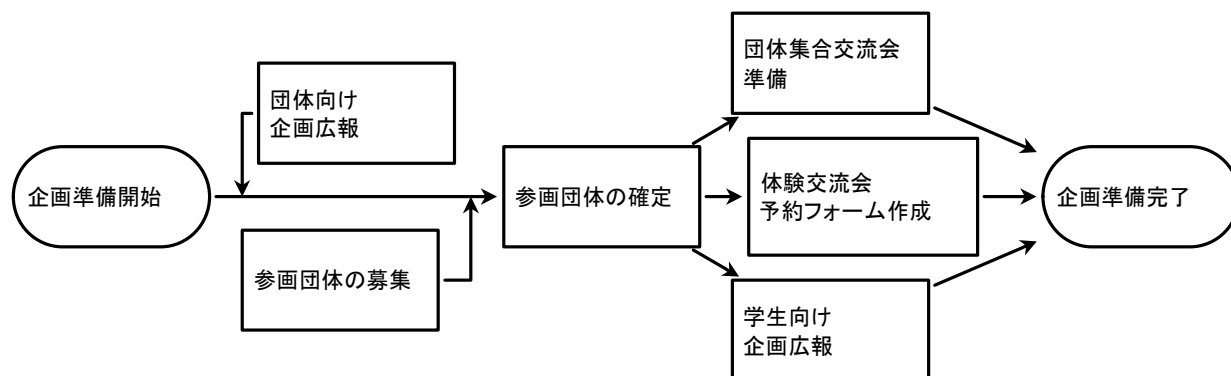


図 2. 企画準備流れ

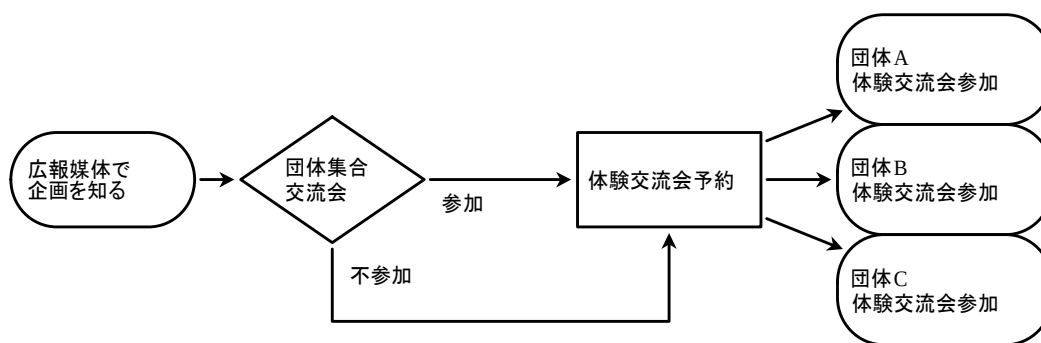


図 3. 企画参加学生の活動例イメージフロー

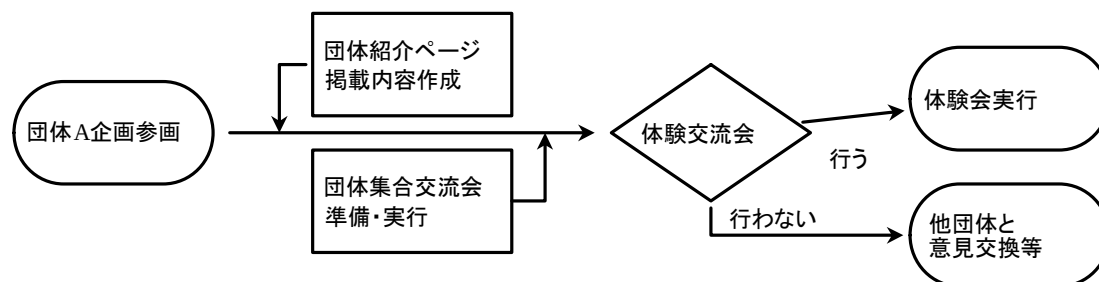


図 4. 参加団体 A の活動例イメージフロー

立命館大学
教育開発推進機構

ピア・サポ
インデックス



2014年12月

制作協力：D-Plus

ピア・サポ インデックス

ピア・サポートマップ

ピア・サポート プロフィール

文学部 オリター団

経営学部オリター団

学生広報スタッフ

学生コーディネーター

ジュニア・アドバイザー（JA）

障害学生支援室サポートスタッフ

GGP 学生支援団体 まいる

D-plus

入試広報学生スタッフ（オープンキャンパススタッフ）

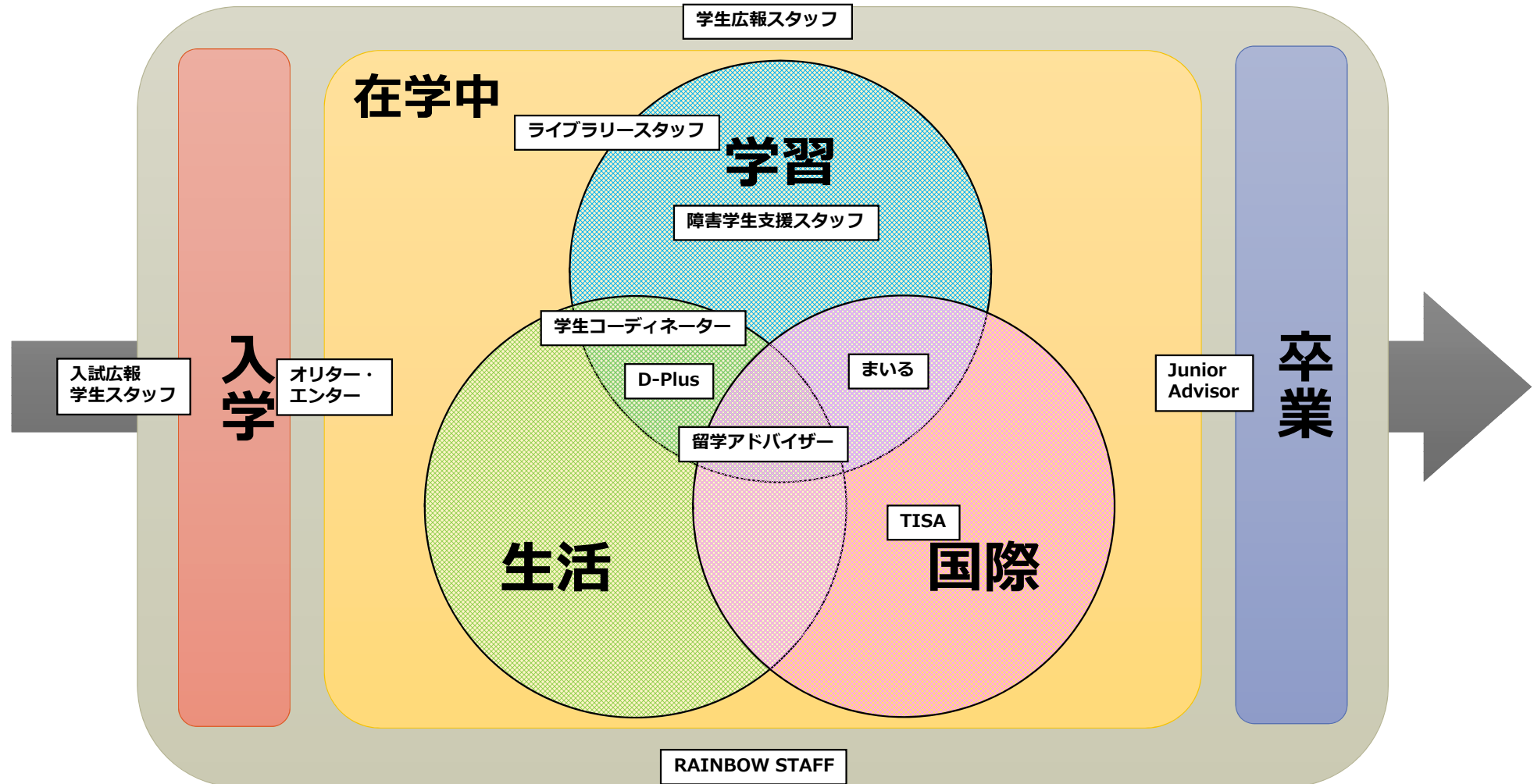
学生ライブラリースタッフ

留学アドバイザー

留学生チューターTISA（衣笠）

RAINBOW STAFF

ピア・サポート・マップ



(注) 本マップはAPS2014に参加したピア・サポート団体（12団体）が掲載されており、立命館大学のすべてのピア・サポート団体は反映されていない

ピア・サポート・プロフィール（サンプル）

ピア・サポート団体同士の連携をより活性化するためのツールです。

団体名称

サポート対象：支援対象

創立年：団体が支援された年

活動場所：主に支援を行っている場所、活動メンバーが集う場所等

連絡先：連携のための連絡を行う場合のコンタクト先

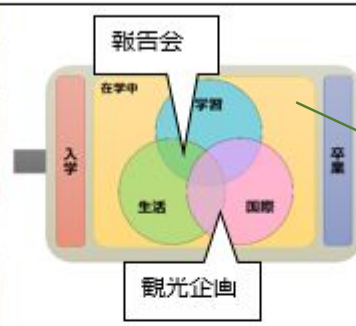
（大学連絡先、団体代表連絡先等）

SSRS

所属：〇〇〇課

サポート対象	立命館大学に在籍する初年次生（留学生を含む）
創立年	1990 年
活動場所	KIC:カンファレンスホール、BKC:ユニオンスクエア
連絡先	〇〇〇課 075-〇△×-〇△×

所属する
大学の部署



ピア・サポート
マップでの
位置づけ

活動理念

- 活動理念
- 団体が掲げている理念

主な活動・年間表

2月 運営体制発足（全回生から募集・先行）

4月

5月

～

7月

9月

11月

12月

1月

2月

3月

4月

5月

6月

7月

8月

9月

10月

11月

12月

1月

2月

3月

4月

5月

6月

7月

8月

9月

10月

11月

12月

1月

2月

3月

4月

5月

6月

7月

8月

9月

10月

11月

12月

1月

2月

3月

4月

5月

6月

7月

8月

9月

10月

11月

12月

1月

2月

3月

4月

5月

6月

7月

8月

9月

10月

11月

12月

1月

2月

3月

4月

5月

6月

7月

8月

9月

10月

11月

12月

1月

2月

3月

4月

5月

6月

7月

8月

9月

10月

11月

12月

1月

2月

3月

4月

5月

6月

7月

8月

9月

10月

11月

12月

1月

2月

3月

4月

5月

6月

7月

8月

9月

10月

11月

12月

1月

2月

3月

4月

5月

6月

7月

8月

9月

10月

11月

12月

1月

2月

3月

4月

5月

6月

7月

8月

9月

10月

11月

12月

1月

2月

3月

4月

5月

6月

7月

8月

9月

10月

11月

12月

1月

2月

3月

4月

5月

6月

7月

8月

9月

10月

11月

12月

1月

2月

3月

4月

5月

6月

7月

8月

9月

10月

11月

12月

1月

2月

3月

4月

5月

6月

7月

8月

9月

10月

11月

12月

1月

2月

3月

4月

5月

6月

7月

8月

9月

10月

11月

12月

1月

2月

3月

4月

5月

6月

7月

8月

9月

10月

11月

12月

1月

2月

3月

4月

5月

6月

7月

8月

9月

10月

11月

12月

1月

2月

3月

4月

5月

6月

7月

8月

9月

10月

11月

12月

1月

2月

3月

4月

5月

6月

7月

8月

9月

10月

11月

12月

1月

2月

3月

4月

5月

6月

7月

8月

9月

10月

11月

12月

1月

2月

3月

4月

5月

6月

7月

8月

9月

10月

11月

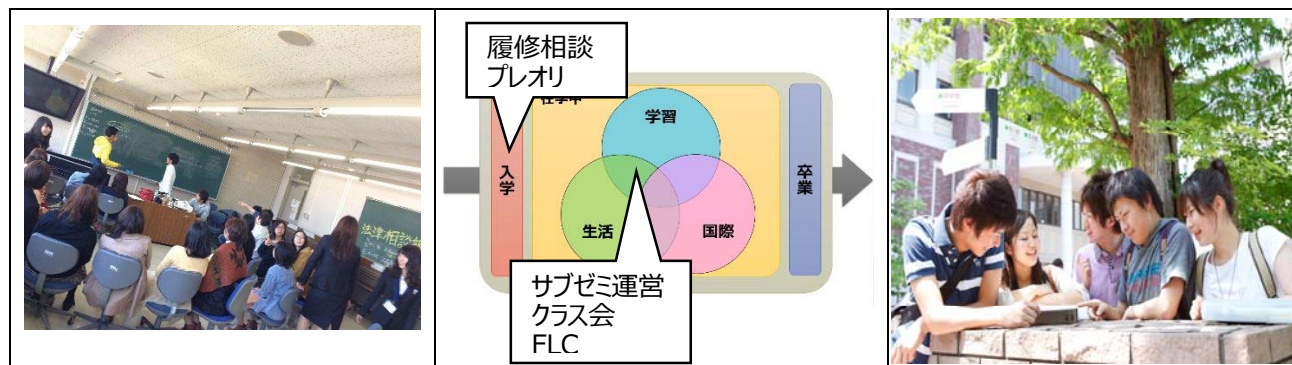
12月

1月

2月

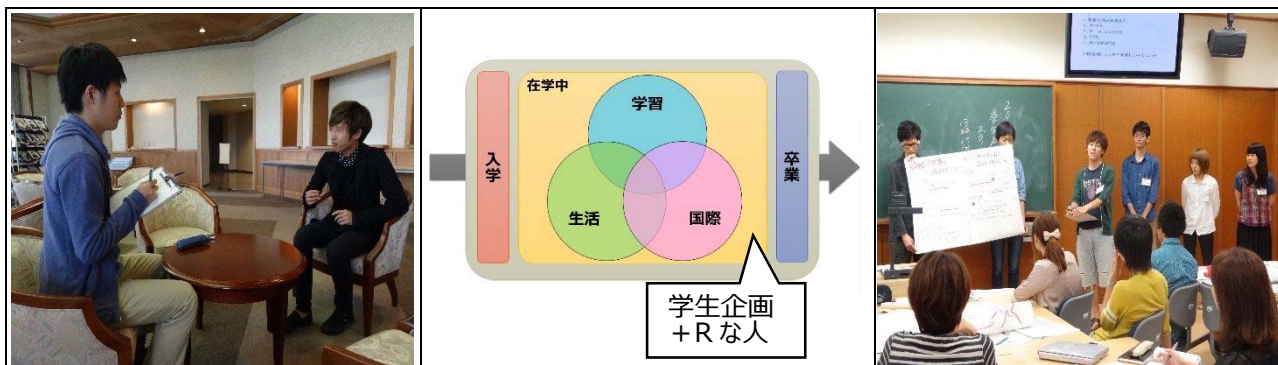
3月

文学部オリター団		所属：文学部自治会
サポート対象	文学部に入学した新入生	
創立年	1970 年代頃から活動開始（1990 年代に入って正式に大学からの支援が始まった）	
活動場所	KIC：文学部自治会室(BOX58)/教室（サブゼミ等を運営）	
連絡先	学生オフィス（衣笠） 075-465-8167 2015 年度文学部自治会オリター団	



活動理念 新入生が充実した大学生活を送ることができるように、大学で「学び成長」できる基盤を整えること、具体的には、新入生の「学習」「生活」「自治」の主体形成を促すことを目的に活動する。	主な活動・年間表 11 月 発足・募集 12 月 顔合わせ 2 月～3 月 春研修・プレオリエンテーション（入学前新入生歓迎企画） 4 月（～7 月）サブゼミナールアワー運営 5 月 FLC（フレッシュリーダーズキャンプ：自治・リーダー養成企画）
GIVE…アピールポイント 新入生全員への太いパイプがあることが強みです！ ● ビラ、広告 etc を新入生全員に配布します。 ● クラス単位でのイベントを宣伝します。 ● 入学した新入生が必ず目にする団体であることが強みです。	TAKE…連携してみたいこと サブゼミあるいは 1 つの企画として各団体さんを紹介する機会を作りたいです！ 留学したい人への対応や留学生の対応を手伝ってほしい！ 履修相談会を実施する際に、留学についての質問や留学生への対応に限界があるのでそんなときに連携がとれれば…。

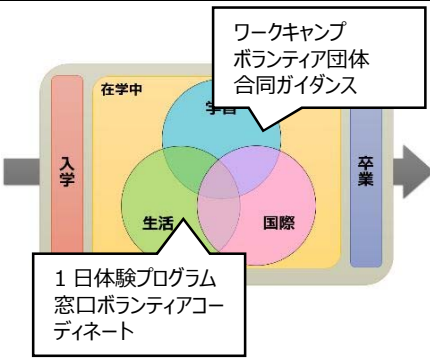
学生広報スタッフ		所属：広報課
サポート対象	立命館大学生らしく頑張る全ての在学生 (＝立命館の学びや経験を生かして結果を残した学生や、自主的な活動の目的達成のために取り組む学生)	
創立年	2003 年	
活動場所	KIC、BKC	
連絡先	広報課 075-813-8146	



活動理念 学生の視点から、 大学の情報を、在学生に 楽しく・分かりやすく 伝えることで、 有意義な行動に繋げてもらう	主な活動・年間表 ★メインは RSWEB の取材です★ ● 「+R な人」の取材・原稿作成 ● 特集の企画・取材（2～3 ヶ月に 1 本） ● 学内行事やスポーツなどの取材 ● twitter によるキャンパス情報の発信
GIVE…アピールポイント 私たちはみなさんの情報発信をお手伝いできます！ 大学公式 twitter を運営しています。 広めたい活動、知ってほしいイベント、 紹介して欲しい人など・・・私たちがリツイートします！！ 内容次第では 人気コンテンツ「+R な人」や イマリツ特集企画などの取材に発展する可能性も？！	TAKE…連携してみたいこと 皆さんの情報発信のプラットフォームになれるアカウントを作りたい！ 現在は twitter 広報に力を入れています！ アカウント：koho_st_RSWEB リツイートに加え、情報くれたらツイートします ky_1f2t3n@yahoo.co.jp (2014 年度山内) まで、ネタとなる情報をお知らせ下さい

【C】立命館 学生コーディネーター 所属：共通教育課・サービラーニングセンター	
サポート対象	・立命館大学・大学院に通う学生(全回生対象) ・学内・学外の社会貢献活動を行う団体（サービラーニングセンター）
創立年	2004 年に創立されたボランティアセンターを改称し、2008 年に設立
活動場所	KIC: 学而館 1 階サービラーニングセンター横、学生ルーム BKC: アドセナリオ 1 階
連絡先	サービラーニングセンター 075-465-1952 衣笠共有アドレス vc_kinugasa@yahoo.co.jp BKC 共有アドレス vc_bkc@live.jp







活動理念 ● 地域と学生を継続的につなぐ。 立命館大学生の力と地域社会のニーズをつなぎ、ボランティアや地域社会に貢献する活動を促進し、学びを深める支援をします。 ● 立命館大学内のボランティア人口を増やす。	主な活動・年間表 ● 窓口コーディネーション(毎日)・・・ボランティアを探しにきた学生へ対話を通してピッタリなボランティアを紹介する活動です。 ● ボランティアに関する企画を通しての活動推進、啓発活動 ・合同ガイダンスの実施(学内：『ボラフェス』 学外：『LSV』) ・月 1 企画『ボランチ』(前期)『つまみ食いボランティア』(後期)実施 ・ボランティア一日体験プログラム『イチボラ』実施 ● ボランティア情報ペーパー『Volala』の発行(月 1)
GIVE…アピールポイント 多様な分野のボランティア募集情報を紹介することができます！ いろんなイベントや企画のメンバー(ボランティア)を広く募集することができます！ 学外の NPO や地域団体と深く関わっているため、団体の魅力を紹介できます！ 学内のボランティア系ともつながっているため、紹介することができます！ 大学周辺の地域の魅力を伝えることができます！	TAKE…連携してみたいこと 活動紹介のムービー作成を手伝ってほしい！ ・1 回生対象のボランティア入門講座、相談会 ・留学生対象のボランティア相談会 ・大学周辺地域のことをもっと知ろうツアー ・周辺地域で活発に活動している団体の取材 ・地域貢献に関わる活動をしている学生や、学内団体への取材 ・ボランティア募集情報や企画の情報発信協力 学生の声を届けてほしい！ 新しい企画と一緒に作ってほしい！

2014 年度 学生コーディネーター年間計画表

月	メンバー内企画	学生対象企画 (『太字』は企画名称)
4 月	◎2014 年度前期新メンバー募集 ◎勉強会『OJT』実施	◎『ウェルカムアワー』でボランティア説明会実施 ◎月一企画『ボランチ』実施
5 月	◎新メンバー研修合宿 ◎月一勉強会『団体調査』実施 ◎月一相談会実施	◎学内ボランティア系団体合同ガイダンス 『ボラフェス』参加 ◎月一企画『ボランチ』実施
6 月	◎月一勉強会 特別合宿 『LSV 直前決起集会』実施 ◎月一相談会実施	◎学外ボランティア団体合同ガイダンス 『LET's START VOLUNTEER』実施 ◎月一企画『ボランチ』実施 ◎ボランティア体験プログラム(複数日プログラム) 『あやべ里山再生プロジェクト』実施
7 月	◎2014 年度前期活動ふりかえり実施	◎月一企画『ボランチ』実施
8 月	◎2014 年度後期計画たて ◎学生向けニーズ調査 ◎衣笠・BKC 合同合宿・任命式	◎団体向けニーズ調査 ◎高島地域活性化プロジェクト(複数日プログラム) 『高島ワークキャンプ』実施
9 月	◎2014 年度新メンバー募集	◎ボランティア体験プログラム(単発プログラム) 『あやべ里山再生プロジェクト』実施 ◎広報誌『Volala♪ 10月号』発行
10 月	◎2014 年度新メンバー募集 ◎新メンバー研修 ◎月一ボランティア企画実施	◎学内ボランティア系団体合同ガイダンス 『ボラフェス』参加 ◎広報誌『Volala♪ 11月号』発行
11 月	◎新メンバー研修合宿 ◎月一勉強会 『イチボラ参加団体理解』実施 ◎月一ボランティア企画実施 ◎学生コーディネーターパーカー作成 ◎ボラセンツァー実施	◎ボランティア一日体験プログラム 『イチボラ』実施 ◎学園祭展示企画@ROSSO 『あなたにピッタリなボランティア』実施 ◎月一企画『つまみ食いボランティア』事前企画実施 ◎広報誌『Volala♪ 12月号』発行
12 月	◎月一勉強会 特別合宿 『ファシリテーター養成講座』実施 ◎月一ボランティア企画実施 ◎学生コーディネーター内相談会 ◎ボラセンツァー実施	◎ボランティア一日体験プログラム 『イチボラ』実施 ◎月一企画『つまみ食いボランティア』実施 第1弾『え!?キャンドル作りが環境保全に!? (仮)』 ◎広報誌『Volala♪ 1月号』発行
1 月	◎勉強会実施 「かっこいいチラシの作り方」実施 ◎月一ボランティア企画実施	◎月一企画『つまみ食いボランティア』実施 第2弾『バク君と行く、突撃オモニの台所。お正月編 (仮)』 ◎広報誌『Volala♪ 2月号』発行
2 月	◎2014 年度後期活動ふりかえり実施 ◎月一ボランティア企画実施	◎高島地域活性化プロジェクト(複数日プログラム) 『高島ワークキャンプ』実施
3 月	◎2015 年度前期計画たて ◎月一ボランティア企画実施 ◎衣笠・BKC 合同合宿・任命式	◎OIC サービスラーニングセンター開設記念企画 『サービスラーニングセンターへようこそ! (仮)』実施

龍谷大学 大学教育開発センター通信

Ryukoku University
Center of Educational
Development Report

2012
02



龍谷大学
RYUKOKU UNIVERSITY

大学教育開発センター | 〒612-8577 京都市伏見区深草塚本町67
Tel 075-645-2163 Fax 075-645-2190 <http://www.ryukoku.ac.jp/faculty/fd/index.html>
発行日：2013年3月 編集・発行：龍谷大学 大学教育開発センター



2012, Number 02

CONTENTS

p3

2012年度指定研究プロジェクト成果報告

p4

第8回 龍谷大学FDフォーラム2012

「大学院教育の課題と大学院FD」開催報告

p6

学生FDサロン開催報告

p8

シラバスに関する研修会

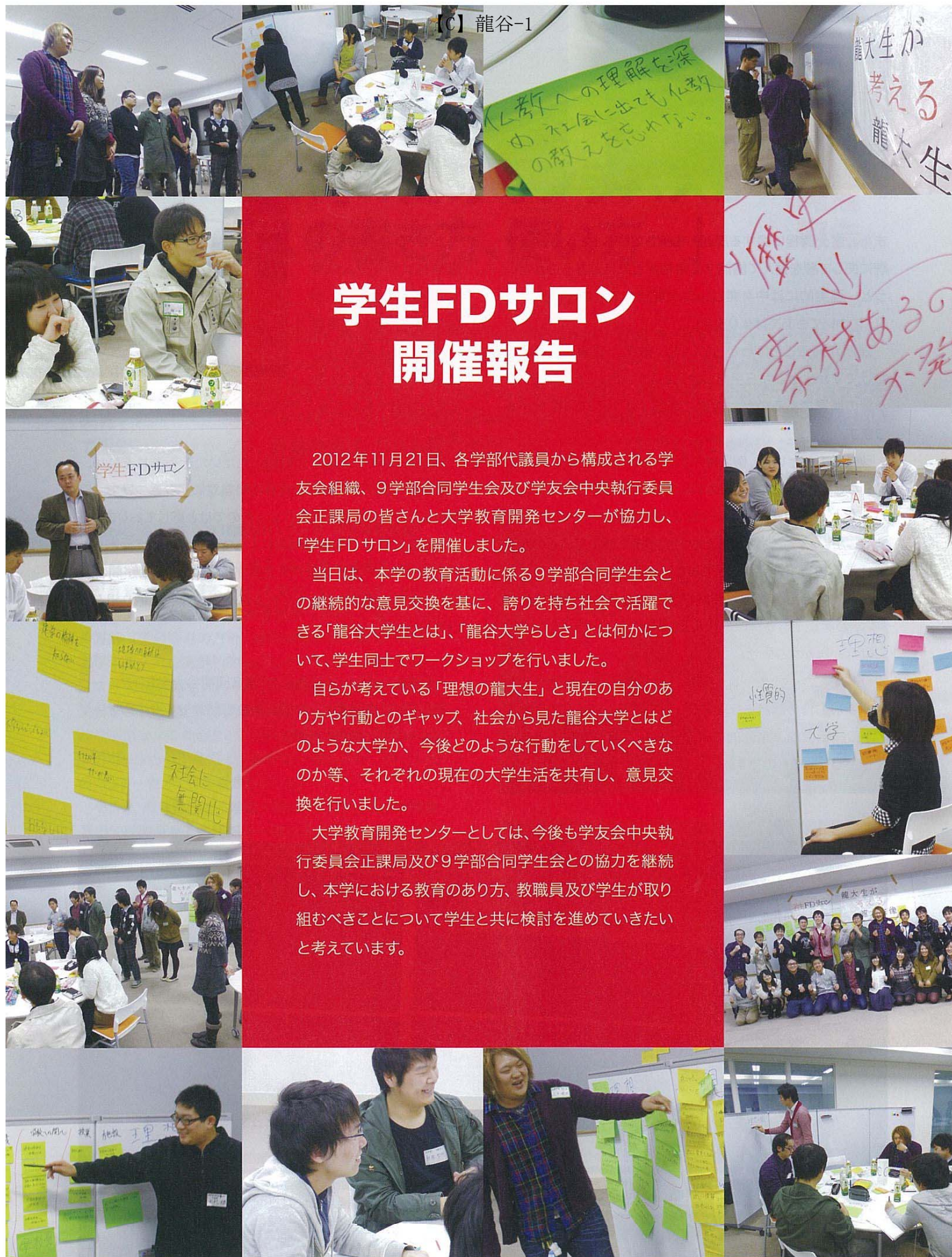
「誰のため、何のためのシラバスか～シラバスの書き方、使い方～」開催報告

p10

2012年度大学教育開発センター事業内容

p12

2012年度自己応募研究プロジェクトポスター展示のご案内 新着図書紹介



【C】龍谷-1

学生FDサロン 開催報告

2012年11月21日、各学部代議員から構成される学友会組織、9学部合同学生会及び学友会中央執行委員会正課局の皆さんと大学教育開発センターが協力し、「学生FDサロン」を開催しました。

当日は、本学の教育活動に係る9学部合同学生会との継続的な意見交換を基に、誇りを持ち社会で活躍できる「龍谷大学生とは」、「龍谷大学らしさ」とは何かについて、学生同士でワークショップを行いました。

自らが考えている「理想の龍大生」と現在の自分のあり方や行動とのギャップ、社会から見た龍谷大学とはどのような大学か、今後どのような行動をしていくべきなのか等、それぞれの現在の大学生生活を共有し、意見交換を行いました。

大学教育開発センターとしては、今後も学友会中央執行委員会正課局及び9学部合同学生会との協力を継続し、本学における教育のあり方、教職員及び学生が取り組むべきことについて学生と共に検討を進めていきたいと考えています。



9学部合同学生会代議員(当時) 大上 陽平
(法学部4年)

当日、私は司会者として学生FDサロンに参加しました。

学生FDサロンを初めて開催しましたが、今回の取り組みは成功だったと思います。初の開催であり、参加者の半分以上は「学生FD」という言葉も知らない状態でしたが、3つに分かれたどのテーブルも、会話が途切れることなく盛り上がり良い雰囲気だったと思います。

最終的に全体での意見交換を行いました。今回の結論としては、「建学の精神」や大学の掲げるスローガンを学生自身が消化しきれていないという事だと思います。龍大だからこそ持つ個性・ブランドを学生が感じる事が出来ず、そこから劣等感を感じる学生が少なからず存在するという事です。

我々学生に必要なのは、とにかく目標を持つ事だと思います。龍谷大学に入学した自分はどうなりたいのか。その目標の為に、何を考え、何をすべきなのか、自分という「芯」を持つのが大事だと思います。その「芯」を補強するのに、大学の掲げるスローガンやブランドが役立つのではないかと思います。

私は、学生FDを行う団体の運営者は学生FDが目的になってはならないと考えています。大学を「より良い学びの場」にしたいと思うのはとても大切な事ですが、「より良くなった学びの場」で目指す自分を考えるのも同じくらい大切だと思います。



学友会中央執行委員会正課局長 相良 翔子
(国際文化学部3年)

学生FDサロンに参加し、グループディスカッション形式での議論はあまり経験が無かったのですが、「本当の龍大生像とは？」という1つのテーマに沿ってざっくばらんに気軽にアイデアを発言し、誰かが発したその一言から派生して、新たなアイデアが他の人からレスポンスされるまでの速さとそのやり取りのテンポの良さが心地よく、初めて会った他の参加者の方とも抵抗無く議論することが出来ました。またこの企画を通して、自分1人の視点には限界があり、だからこそ対話が必要なのだという事を強く感じました。

この企画に参加させて頂き、今回は学生同士の対話でしたが、今後大学教職員の方々と学生が対話を行う機会がより多く設けられることで、相互の理解が今よりももっと深くなり、その対話を通して共に大学の教育について考えていくことも出来るのではないかと私は考えています。しかしながら、その為には前提として、今自分が受けている教育を学生自身が再度見つめなおすことが求められるでしょう。

今回、そのきっかけを与えて頂き、本当にありがとうございました。

龍谷大学 大学教育開発センター通信

Ryukoku University
Center of Educational
Development Report

2013
02



龍谷大学
RYUKOKU UNIVERSITY

大学教育開発センター | 〒612-8577 京都市伏見区深草塚本町67
Tel 075-645-2163 Fax 075-645-2190 <http://www.ryukoku.ac.jp/faculty/fd/index.html>
発行日：2014年3月 編集・発行：龍谷大学 大学教育開発センター



■FDフォーラムの様子

22号館2階、3階エレベーターホールにて2011年度及び2012年度自己応募研究プロジェクトの最終報告パネルを展示しました。

多くの方に興味関心をもって観覧いただきました。



2013, Number 02

CONTENTS

p3

2013年度FDフォーラム開催報告

p4

学生FDサロン開催報告

龍大生の考える龍大ブランド～龍大の強みって？～

p6

2013年度大学教育開発センター事業内容

p8

2013年度自己応募研究プロジェクトポスター展示のご案内 2013年度指定研究プロジェクト成果報告

学生FDサロン開催報告

龍大生の考える龍大ブランド ～龍大の強みって？～

学友会選挙で選ばれた代議員によって構成される9学部合同学生会では、学生のより良い正課環境向上を目的とし、学生目線で自身の学びについて考える、学生FD活動が活発になってきています。大学教育開発センターでは、学生の主体的な学びをサポートするため、昨年より9学部合同学生会と連携を深めてきました。

2013年12月5日、各学部代議員から校正される学友会組織、9学部合同学生会及び学友会中央執行委員会正課局の皆さんと大学教育開発センターが協力し、昨年度に引き続き「学生FDサロン」を開催しました。

今回は「龍大生の考える龍大ブランド～龍大の強みって？～」というテーマで、普段何気なく通っている大学を、自分たちがどのように感じているのか、また、周囲からはどのように受け止められているのか等を話し合い、本学の強みや取り組むべき課題について意見を共有しました。

大学教育開発センターでは今後も学友会中央執行委員会正課局及び9学部合同学生会との協力を継続し、本学における教育のあり方、教職員及び学生が取り組むべきことについて学生と共に検討を進めていきたいと考えています。



9学部合同学生会代表
安田 浩崇

私は今回初めてFDサロンに参加させて頂きました。FDという言葉も当時はあまり理解しておらず、ただグループディスカッションに参加しただけになってしまいましたが、その中でも沢山のことを得ることが出来ました。

龍大からイメージされるものをグループで議論していく中で自分だけでは思いつかないようなことがどんどん出て来てきました。一人では限界があることでも色々な人と交流していくことで新しい価値観や考えに触れそのことで自分の視野が広がっていきんだと実感しました。

この企画に参加して感じたことですが、私、含め今の学生に必要なのはとにかく目標を持つことではないかということです。

龍谷大学に入学した自分はどうなりたいのか。その目標のためにはどのような段階があって、何をすべきなのかをしっかり考える必要があると思います。大学生活は勉強以外にも様々なことをやることの出来るチャンスです。その意識づけとして大学の建学の精神やスローガンを使っていくのはいいのではかと思えます。

そのためにも今回のような企画があることをより沢山の学生に伝えて参加を促すことが大切だと思います。





法学部執行委員長
茂木 穂波

私は9学部合同学生会代議員として学生FDサロンに参加しました。グループに分かれて話し合い最終的に全体での意見交換を行う形式で、テーマは「龍大生の強みとは何か」というものでした。学生同士でそれぞれの意見を伝え合い、自分の考えとは違った新しい視点に共感することもできました。多かった意見は、大学の雰囲気やキャンパスごとに異なり学生の個性が様々で良いということや、他大学と比べると積極的な学生自治が行われているのではないかと感じました。一方で、学生の正課に対する意識の差が問題点として挙げられ、学生ひとりひとりが自分の目標を明確にして意欲的に学んでいく必要があると感じました。

今回のように、学部を超えた学生同士での話し合いをすることで大学へのそれまでのイメージや正課環境への関心も高まると思います。今後もこのような機会には積極的にしようと感じました。



理工学部執行委員長
樋栄 潤樹

今回の学生FDサロンでは、「龍大ブランド」というテーマで、少人数の班での討論を行いました。その際、結論を導くために段階をいくつかに分けて考え、それを繋ぎ合せていくという形式で行いました。

この方法では、話し合いの方向性が最初に明確になっていたため、最終的な意見をまとめることも比較的スムーズに行えたと思います。また、段階ごとに班の全員が必ず一度は発言し、また他の人の意見はしっかり聞く、という目標をしっかりと達成することが出来たと考えています。

今回の討論では、面識のある人もいましたが、初対面の人もいたので、最初は妙な緊張感がありました。しかし、同じ「龍谷大学生」という立場で、お互いが意見をしっかりと伝えることが大切であると感じ、また相手の意見を尊重し深め合うことで、違った角度から物事を捉えることが出来たと思います。

今回体験したことを今後の生活の中でも生かすことが出来たらと思うと同時に、次回またこのような機会があれば参加したいと思いました。

